

児玉地域における古墳時代前期の土器様相(下)

一女堀川・旧赤根川流域の古墳時代前期の土器の分析を中心として一

松 本 完

3 鉢の分類と編年

児玉地域における古墳時代前期の鉢は、弥生時代後期以来の在来の鉢である樽式・樽式系鉢⁵³⁾と外来の鉢である東海西部、さらに西方の諸地域に由来する鉢に大きく分けられる。

後者の外来の鉢は、東海西部を媒介とするかと思われる鉢⁵⁴⁾とS字状口縁の平底鉢(以下、「S字鉢」と呼称する。台付鉢も少数みられる)と、少数の布留式系あるいは畿内系の鉢、山陰系の鉢(あるいは北陸系の鉢)、畿内系の屈曲口縁鉢および系統のよくわからない口縁部が屈曲、屈折しない鉢(直口縁鉢あるいは単口縁鉢)に分けられる。

また、片口鉢は一器種、あるいは鉢の一器形として区分すべきであろうが、ほとんどが樽式・樽式系に伴うと考えられ、樽式・樽式系鉢の一種として扱うことにする。

なお、東海や畿内とその周辺に淵源する鉢に関しては、器形全体に基づく好適な呼称がないこともあり、口縁部高／器高比に基づき、つまり口縁部の器高に占める相対的な高さ、長さを基準に、2群(後述する「長口縁鉢」、「短口縁鉢」の2群)に大きく分け、口径／器高比および口縁部高／器高比、全体形の様態を加味し、群ごとに類別した(第15図)。

また、上記した法量比に加え、付加的な法量比として、屈折部径／口縁部径の比率を用い、一部の類別をさらに細分した(後述)。

鉢は、法量の違いに基づき、通常大型鉢、中型鉢、小型鉢の3種に分けられるが、大型鉢は、例数がかなり限られるため、主に中型・小型鉢を対象として議論を進める。検討する資料は、集落跡出土土器が中心となるが、墳墓出土土器も含め検討するのは、前節の壺と同様である。

以下、鉢の分類案を示し、変遷の概要を記す(第14～20図)。

a 樽式・樽式系鉢および片口鉢

樽式・樽式系鉢と片口鉢を、ここでは、まとめて記すことにしたい。

樽式・樽式系鉢

樽式・樽式系鉢は、体部がゆるやかに彎曲しながら立ち上がる器形の鉢である(第14図1～6)。内外面のミガキが一つの特徴であるが、ミガキが顕著ではないものも含まれる。第14図4のような内外面赤彩されたものもみられる。

片口鉢

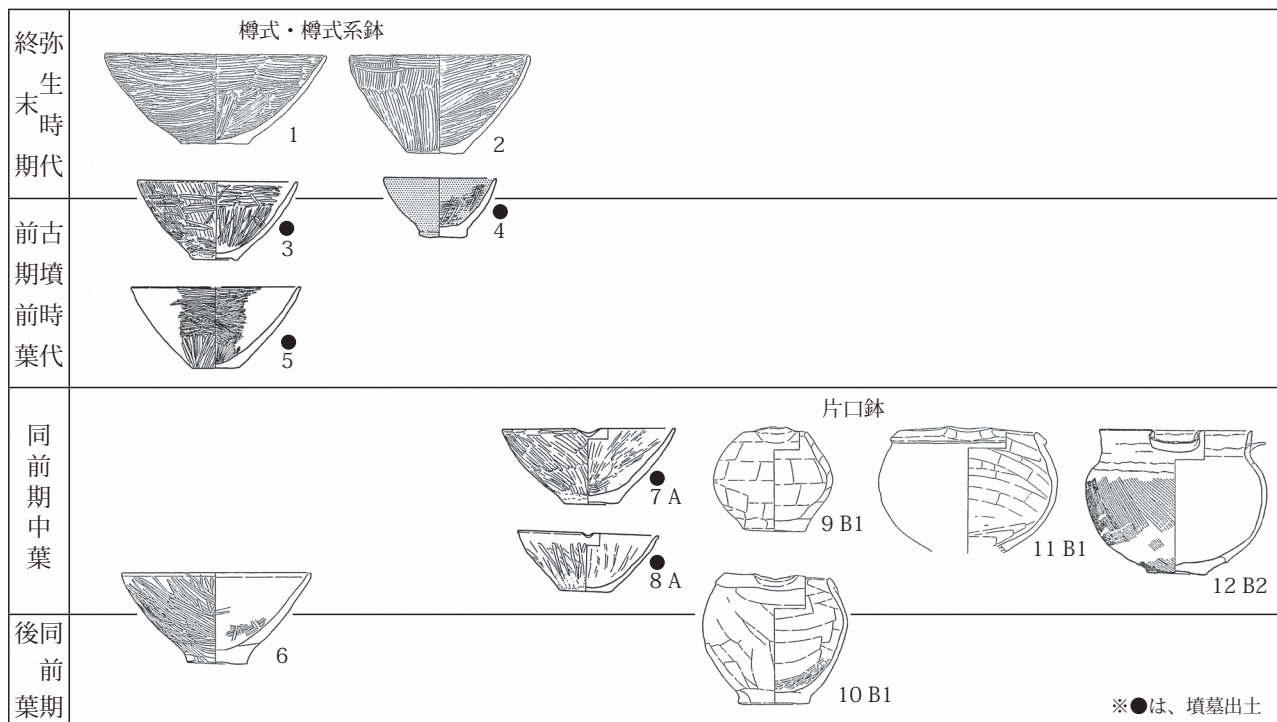
片口鉢は、樽式・樽式系の鉢の端部の一角を片口状にするものを、A類(第14図7・8)、無頸壺に近い器形の鉢の端部に片口が付されるものを、B1類(同9～11)、甕にも似た胴部あるいは体部を有し、短い口縁部の一部に横長の片口が付されたものを、B2類(同12)とする。

いずれも例数がわずかではあるが、児玉地域では、樽式・樽式系土器の主要な分布域である丘陵部に限らず、台地部の遺跡からの出土例が目立つことが指摘できる。

B1類に関しては、樽式・樽式系土器の主たる分布域の群馬県域でも例数がそれほど多くなく、散見しえた限りではあるが、類例がとくに少ない地域があるかにもみえる。

大木紳一郎の群馬県富岡市南蛇井増光寺遺跡出土土器の分析によるなら、群馬県甘楽地域では、B1類の片口鉢は、大木の樽式「3期」に出現するようである(大木1997:703-709頁)。大木は、内外面に付着する「灰状物質」(同:684・685頁)の共通性から、片口鉢B1類と後述する有孔鉢(本稿:11・12頁)が一体として使用された可能性を推定している(同)。今後さらに検討すべき課題であろう。

管見に触れえた例としては、地域は異なるが、沼田市戸神諏訪遺跡87号住居跡出土例(新倉・小野ほか1990:87号住居跡出土土器(1)・11)が最も新しいらしく、本稿の古墳時代前期後葉～末葉、「樽式系段階後半」(荒木2000:387頁)とされ、比較的長期にわたり形態が大きく変わることなく製作され続けた鉢とみられる。また、利根・沼田地域では、この種の片口鉢に台部のつく例がみられるようである(同上:第389・390頁)。



第 14 図 樽式・樽式系鉢、片口鉢の変遷（縮尺：1 / 6）

b 長口縁鉢

西日本各地では、「丸底鉢」（一部は「丸底壺」、あるいは「丸底土器」）と呼称されてきた器種、器形であるが⁵⁵⁾、本地域あるいは本地方では、丸底の器種、器形の定着度が低く、ほとんどが平底あるいは小さな凹み底であり、「丸底」の呼称自体適切ではない。

時に体部高を大きく上回る長さ（高さ）の口縁部が付く一群の鉢であることを勘案し、暫定的に「長口縁鉢」と呼ぶことにしたい。よりの確な用語、用語の体系が案出されるようであれば、それに従いたいと思う。

以下、長口縁鉢を A～C 類に大別し、さらに法量比の分布のまとまりを捉え、細分する（第 15 図）⁵⁶⁾。

また、当然問題となる古墳時代前期の直口壺、鉢の区分、それらと古墳時代中期の小型直口壺との異同の問題の目安として、古墳時代前期に関しては、小型直口壺が僅少なこともあり、大型・中型の直口壺、古墳時代中期の小型直口壺の同じ法量比を、第 15 図に重ねて示した⁵⁷⁾。

まず、分類に触れる前に、第 15 図全体から読み取れる問題点をいくつか列記しておきたい。

前期の鉢は、口径／器高比に関して、1.0 以上に収まることは、すでに指摘があるとおりである⁵⁸⁾。壺と鉢は、おおむね口径／器高比（第 15 図 A、横軸）が 1.0 を境に区分することができる。前期の直口壺の大半が、口径／器高比が 1.0 以下であることも、この

区分の基準が妥当であることを示している。

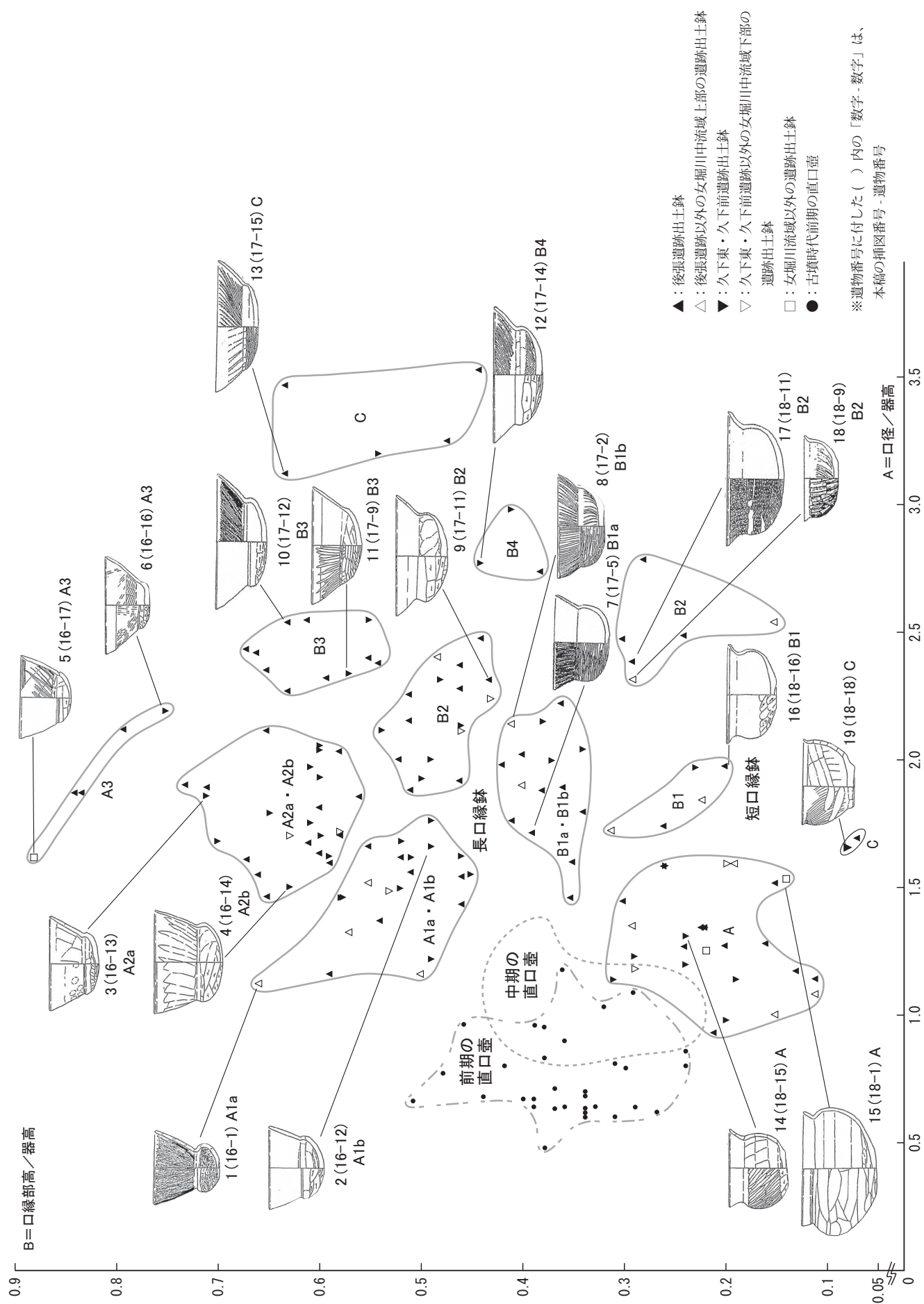
一方、中期の小型直口壺は、この境界をまたがるように分布する。中期の小型直口壺を、壺と鉢に分けるのは、明らかに鉢と思えるものは別にして、無理があるようにみえる⁵⁹⁾。

前期の鉢では、およそ口縁部高／器高比（第 15 図 B、縦軸）が 0.34 くらいを境に、以下に記す長口縁鉢、短口縁鉢を区分することができる。

第 15 図に用いた資料は、大半が女堀川中流域上部の後張遺跡 A 地点の住居跡出土鉢（増田・立石ほか 1982：第 52 図 8・9・11・12 他）、同遺跡 C 地点河川跡出土鉢（第 110 図 89～94・176・180・181・194・198）、同中流域下部の久下東・久下前遺跡出土土器（恋河内・的野 2010：第 120 図：114・115・117・118 他）である。第 15 図に用いた前期の鉢全資料数 144 点中、前者が 71 点、後者が 46 点を占める。

2 つの遺跡は、同じ河川の流域に所在する規模の大きな拠点集落跡であり、直線距離にして 1.6km ほどしか離れておらず、地域的な変異をさほど考慮することなく、鉢の器形の分布傾向を読み取ることができる考えたためである⁶⁰⁾。

時期的には、大半が前期末葉である。鉢の盛行と多様化は、前期後葉に端を発するものの、前期末葉の際立った特徴であり、前期中葉以前は、鉢の出土例自体僅少である。



第15図 鉢、直口壺の口径／器高比、口縁部高／器高比分布図 (図の縮尺：1／6)

久下東・久下前遺跡の鉢に関しては、完形品あるいは準完形品にほぼ限り数値化した。後張遺跡 A 地点の鉢では、復元個体をかなり含め数値化したため、後張遺跡 A 地点の鉢が多様なのは、その影響が多少あるのかもしれない。

とは言え、そうした「影響」を考慮して、なお後張遺跡と久下東・久下前遺跡の鉢では、際立った違いがみと取れる。

端的に、久下東・久下前遺跡の鉢は、規格性が高く、強くまとまる傾向がみられ、後張遺跡の鉢は、久下東・久下前遺跡の鉢の間や分布の集中する範囲の縁辺を埋めるように分布する傾向が顕著である（第 15 図）。後述する長口縁鉢 A3 類、B3 類、C 類、短口縁鉢 B1・B2 類のように、口径／器高比、あるいは口縁部高／器高比が高く、いわば極端な器形の外縁的な範囲に、後張遺跡の鉢が多数を占め、あるいは独占する領域（後述する類型）がみられる（同上）。

いくつかの解釈が可能であろうが、鉢そのものの機能や役割を、出土遺構、出土状態などの分析を通じて明らかにするとともに、鉢の諸器形の構造的な違いが何によるのか、さらに突き詰める必要があるかと思う。ここでは、2つの集落跡では、前期末葉の鉢の規格性に大きな違いがみられることを確認し、向後の議論に

委ねることにしたい。

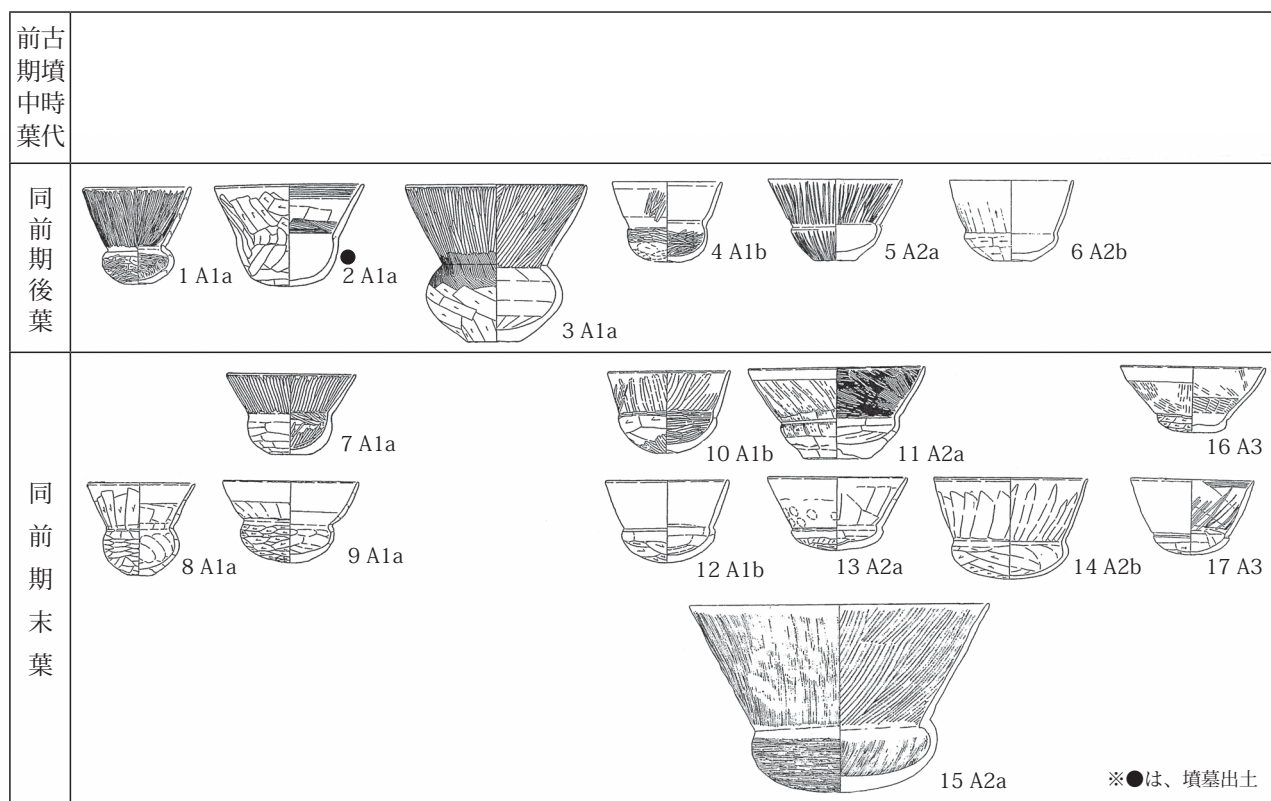
本稿で用いた鉢、とくに長口縁鉢の類別全体の妥当性について一言触れておくなら、第 15 図から読み取ることができるように、口径／器高比、口縁部高／器高比は、強く関連しながら種々の器形のまとまりを形作っているらしく、どちらかの比率を優先させた類別は、事実上困難であった。現状では、長口縁鉢全体を一貫して類別できるのは、口縁部高／器高比が大きくなる（口縁部が伸長する）につれ、口径／器高比が大きくなる（全体形が低平になる）という相関関係を考慮した A～C 類の大別と、その下位の小区分であると思われた⁶¹⁾。

長口縁鉢の分類とその変遷を、以下記す。

A 類

長口縁鉢の中でも、総じて体部に比し口縁部が長く、かつ全体的に丈高の器形の鉢である（第 15 図 1～6、第 16 図）。

口径／器高比、口縁部高／器高比のみでは、屈折部径や胴部最大径部位の広狭、横幅の大小は限定できないため、実際 2 種の鉢が同じ類別に含まれることがみと取れた。暫定的に屈折部径／口径比を用い、同比率の中央値に近い 7.0 を目安に、同比率が 7.0 未満の鉢を a とし、7.0 以上の鉢を b とした。



第 16 図 長口縁鉢 A の変遷（縮尺：1／6）

A 類の鉢は、A1a・A1b 類、A2a・A2b 類、A3 類の 5 類に細分した。

A1a 類 A 類の鉢の中でも、相対的に口縁部が短く、丈高の鉢のうち、屈折部径／口径比が 7.0 未満の鉢である(第 16 図 1～3・7～9)。以下、細別に関しては、第 16 図以下の図のみ指示する)。直口壺に近い器形であるが、直口壺の方が丈高で、口縁部が短いことが区分点になる。第 16 図 2 のような例外もあるが、前期後葉の段階には、丁寧なミガキが卓越する。

A1b 類 全体的な器形の様態は、A1a 類と大きく変わることはないが、屈折部径／口径比が 7.0 以上の鉢である(第 16 図 4・10・12)。屈折部の幅が広がることで、A1a 類に比べ、鉢らしくなった印象を受ける。A1a 類同様、前期末葉のある段階以降は、外面のミガキが衰微し、ナデやケズリの例が多くなる。

A2a 類 A1 類に比べ、口縁部が長く、相対的に器高の低い鉢を、A2 類とし、そのうち屈折部径／口径比が 7.0 未満の鉢を、A2a 類とする(第 16 図 5・11・13・15)。前期末葉に典型的な口縁部が長く、体部高の低い長口縁鉢の多くは、この A2a 類および、次に記す A2b 類に含まれるとみてよいであろう。口縁部の長さや体部高の低さに応じて、さらに細かく分けられそうでもあるが、一括りにしておく。

A2b 類 A2a 類に比べ、口縁部の開きが弱く、屈折部が太い鉢を、A2b 類とする(第 16 図 6・14)。屈折部径／口径比が 7.0 以上の鉢である。

A3 類 口縁部が極端に長くなり、体部がほとんど退縮して小さくなった鉢である(第 16 図 16・17)。外面調整は、磨きがほとんどみられず、ナデ調整が多い。体部から底部にかけて、ケズリが加えられたものも多いようである。古墳時代前期末葉に特有の鉢であるが、中期中頭段階まで残存するか否かは、今後の検討を要する。

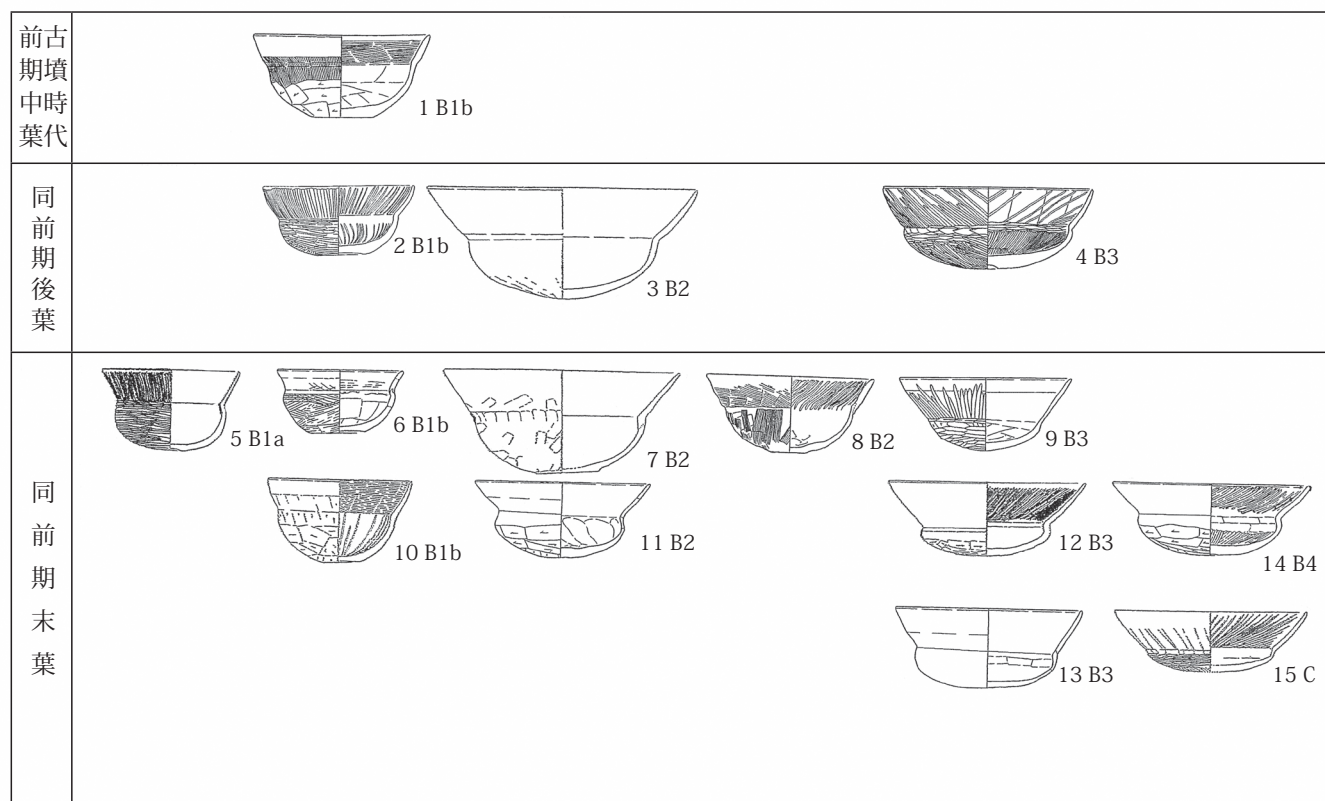
B 類

総じて A 類に比べ、器高の低い鉢を、B 類とする(第 15 図 7～12、第 17 図 1～14)。あるいは、口縁部高／器高比が同じような A 類の鉢と比べると、B 類の鉢は、口径／器高比が大きい、全体的に低平であるといった方がより適切であろう。

B 類の鉢の多く、とくに下記 B2 類以下の鉢は、「浅鉢」と呼んでもよい器形である(第 17 図 3・4・12～15)。

B 類は、以下のように細分できる。

B1a 類 B 類の中で、口縁部が相対的に短く、丈高の鉢を B1 類とし、屈折部径／口径比が 8.0 未満の鉢を、B1a 類(第 17 図 5)、同比率が 8.0 以上の鉢を、



第 17 図 長口縁鉢 B・C の変遷 (縮尺：1／6)

B1b 類とする (第 17 図 1・2・6・10)。B1a 類は、類例に乏しいが、長口縁鉢の中では、短口縁鉢に近い形態である。

B1b 類 B1b 類は、B1a 類に比べ、屈折部がより幅広で、こう言ってよければ、より鉢らしい鉢である (第 17 図 1・2・6・10)。

B2 類 B1 類より口縁部が長く、全体的傾向として丈の低い鉢を、B2 類とする (第 17 図 3・7・8・11)。

B3 類 B2 類に比し、口縁部が長い鉢を、B3 類とする (第 17 図 4・9・12・13)。総じて B2 類の鉢より低平な鉢が多い。

鉢 B1・B2・B3 類は、口縁部高／器高比が大きくなる (口縁部が長くなる) につれて、口径／器高比が大きくなる (器形が低平化する、全体が平べったくなるという器形の準則のもとに、漸移的な 3 つの器形のまとまり (3 器形) を形作っているとみることができる。

B4 類 口縁部の相対的な長さは、B1 類などと大きく変わらないが、全体的な器形が著しく低平化した鉢を、B4 類とする (第 17 図 14)。

C 類

口縁部の長さは区々であるが、「皿」に近いまでに低平化が進んだ鉢を、C 類とする (第 15 図 13、第 17 図 15)。

以上記した長口縁鉢の分類にもとづき、その変遷を辿ることにしたい。

まず、古墳時代前期中葉までは、定型的な長口縁鉢はみられないとしてよい。定型的な長口縁鉢がみられるのは、前期後葉以降である。前期後葉には、一応 A1a・A1b 類、A2a・A2b 類、B1a・B1b 類、B2 類、B3 類と、ほとんどの器形、類型の鉢が、出現するようであるが、実際例数は、ごく限られる。

第 17 図 3 のような例外はあるものの、前期後葉の長口縁鉢は、明瞭な平底を有するものがほとんどである (第 16 図 1・3～6、第 17 図 2・4)。これは、高坏などの他器種とも共通し (本稿：16・17 頁参照)、不備の目立つ模倣土器が多い、前期後葉段階の外來系土器の特徴に合致している。

また、前期後葉の長口縁鉢の外表面調整は、ミガキが卓越しており、前期末葉のある段階から、ナデやケズリが盛行する。この過程と併行して、丸底の例も増加するようである (第 16・17 図)。

前期後葉に、大型・中型の長口縁鉢 B2・B3 類が出

現することにも注意したい (第 17 図 3・4・7)⁶²⁾。長口縁鉢 A3 類、B4 類、C 類は、前期末葉のある段階からみられるようになる (第 16 図 16・17、第 17 図 14・15)。

外面調整におけるミガキとナデ、ケズリの交代、長口縁鉢 A3 類、B4 類、C 類の出現から、前期末葉は、新古 2 段階に分けられる可能性があるが、現状では、新古の峻別はむづかしいかと思う。

c 短口縁鉢

前述したように長口縁鉢に比べ、口縁部の短い鉢である。口径／器高比、口縁部高／器高比にもとづき、以下記す A 類、B1・B2 類、C 類の 4 類に区分できる (第 15 図 14～19、第 18 図 1・3～12・14～18)。

A 類

丈高で口縁部の短い鉢を、A 類とする (第 18 図 1・3・5～7・14・15)。多様な鉢を含んでおり、雑多な印象を受ける。長口縁鉢とは異なり、稀少ではあるが、前期前葉からみられることは間違いない。しかしながら、在来の鉢とも言い切れないようである。

B 類

A 類に比し、低平な鉢を、B 類とする (第 18 図 4・8～12・16・17)。低平さの度合いにより、B1・B2 類に細分した。B2 類は、「浅鉢」と呼んでもよいような器形の鉢である。

B1 類 B 類の中で、比較的丈高の鉢を、B1 類とする (第 18 図 4・8・16)。

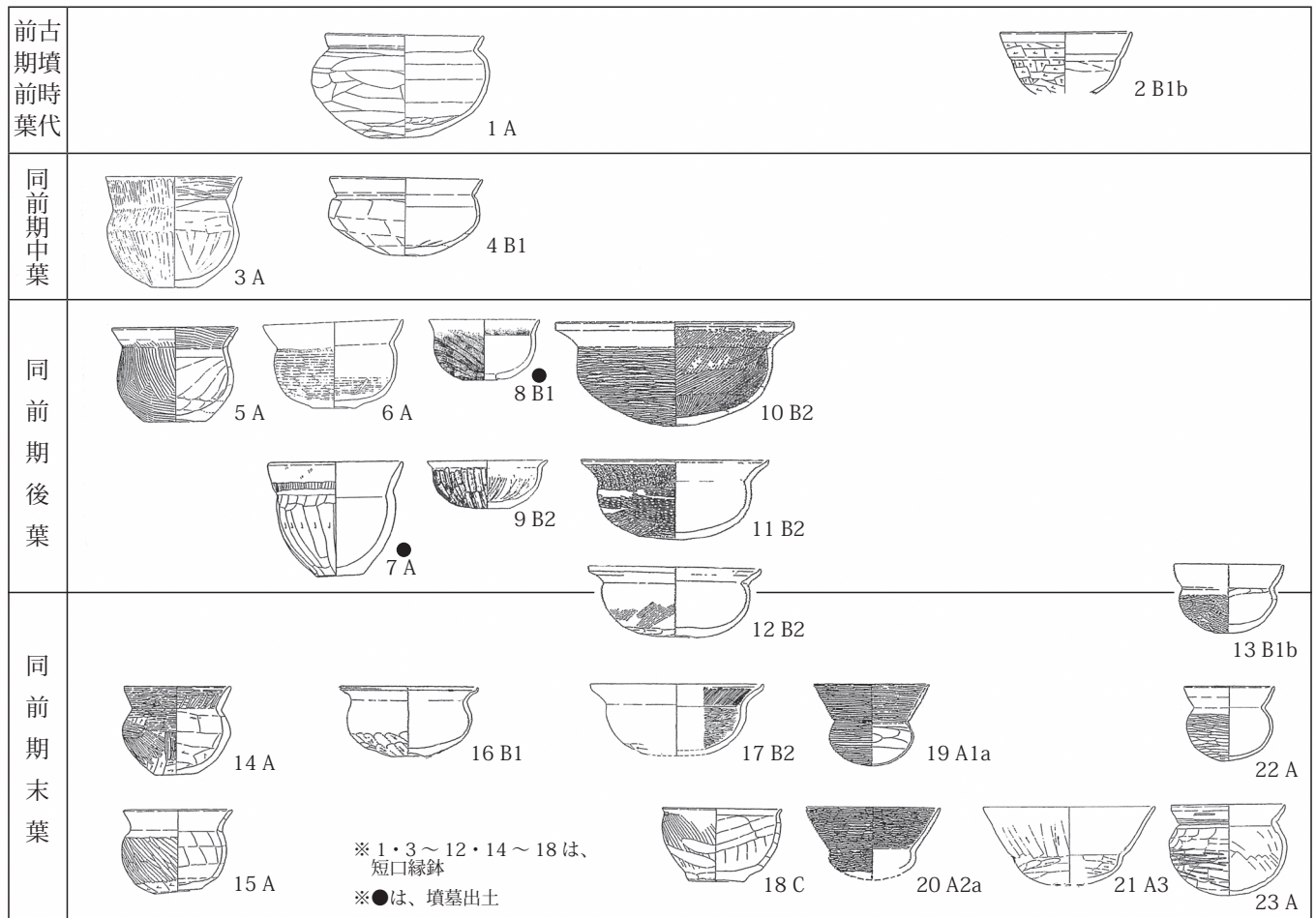
B2 類 B1 類に比し、低平な鉢を、B2 類とする (第 18 図 9～12・17)。B2 類に関しては、端部がつまみ上げられ内彎する口縁部形態、全体的な器形などを共有する特徴的な鉢によって占められている (第 18 図 10～12・8)。

この種の器形の鉢の先駆けをなすように、第 18 図 10・11 のような大型・中型の鉢が、前期後葉に出現するようである。

C 類

短口縁鉢の中でも、とくに端部がわずかに屈折する鉢を、C 類とする (第 18 図 18)。

短口縁鉢に関しては、在来、外來の区別が困難である。例えば、第 18 図 3 の鉢は、在来、外來と分けるなら、とくに外來とする特徴はないかにみえるが、内面屈折部直下のケズリは、在来の鉢には全くみられない調整手法である。あるいは、第 18 図 14・15 の鉢は、同図 22・23 の布留式系の鉢の器形のみ真似た模倣品であろう。短口縁鉢の多くは、在来の土器に系譜



第 18 図 短口縁鉢、布留式系鉢他の変遷 (縮尺：1 / 6)

をたどることができないことは確かである。

先に大型・中型の長口縁鉢 B2・B3 類が、前期後葉に出現したことに注意を促したが、大型・中型の短口縁鉢 B2 類が同じ前期後葉に出現することも、ある種の軌を一にする動きとみてよいと思う。

1 例のみ B1 類 (第 18 図 16) であるが、他は B2 類の前述した特徴的な口縁部の短口縁鉢 (同図 10～12・17) が、前期後葉から末葉にかけて流入することには注意すべきであろう。つまみ上げられた端部や器形が独特であり、特定地域の短口縁鉢と思われるが、来源となる地域を特定することができない。出土遺跡が女堀川中流域上部に限られる点にも留意したい。

d 布留式系鉢および山陰系鉢 (あるいは北陸系鉢)

古墳時代前期のごく細かい横ミガキ⁶³⁾の加えられた精製の土器を、布留式系土器と捉え、その中の鉢を、布留式系鉢とした (第 18 図 13・19～23)。後述する屈曲口縁鉢を除いた布留式系鉢ということになる。いずれも混入する砂粒がごく細かい、精良な胎土

の精製土器である。

また、1 例のみではあるが、山陰系 (あるいは北陸系) かと思われる口縁部下端が短く外折し、口縁部が大きく開く鉢がみられる (第 18 図 2)。外面調整にケズリが多用されており、この点でも異例である。前期後葉以降の鉢とは、時期的にも隔絶しており、系譜などの追跡も今後に期したい。

第 18 図の布留式系鉢および山陰系 (あるいは北陸系) 鉢の遺物番号に付した分類記号は、長口縁鉢、短口縁鉢の分類記号である。なお、第 18 図 22・23 の分類記号のみ短口縁鉢の分類記号である。

布留式系鉢は、大きく分けて 2 群に分けられる。一つは、長口縁鉢に含まれるもの (B1b 類：第 18 図 13、A1a 類：同図 19、A2a 類：同 20)、今一つは、短口縁鉢に含まれるもの (A 類：同 22・23) である。

偶々長口縁鉢、短口縁鉢の複数の類別に分かれる形になったかにもみえるが、別の見方をすれば、前期後葉以降、在来の鉢に系譜を求めることのできない複数の器形の鉢が、忽然と現れ、盛行するが、それぞれの

器形の鉢がいずれも布留式系鉢と関連するとみられる。

布留式系鉢の器形の地域性を指摘する論考もみられるが(次山 2006)、複数の地域の布留式系鉢が土器そのものの搬入や技術移入、模倣の形で影響を及ぼしたとみるか、複数の器形の鉢を保有する特定地域の影響で、鉢の器形構成全体が移入、あるいは模倣されたか、どちらかであろうかと思われる。布留式土器、布留式系土器の影響が、複数器種に及ぶこと、また布留式系の甕が本地域で製作された可能性が高いとする胎土分析にもとづく結論(恋河内・藤根 2018: 423-434 頁)を踏まえれば、やはり後者の可能性が高いとみて無理はない。

全体的な変化の傾向は、短口縁鉢が好例であるが、体部の細かな横ミガキが密に施される段階(第 18 図 13・22)から、横ミガキがまばらになる段階(第 18 図 23)へ、さらに横ミガキがみられなくなる中期初頭の段階という過程をたどることができる。

また、布留式系鉢に関しては、次山 淳が指摘した布留式精製土器の 2 群の区分(次山 1993)も問題になる。

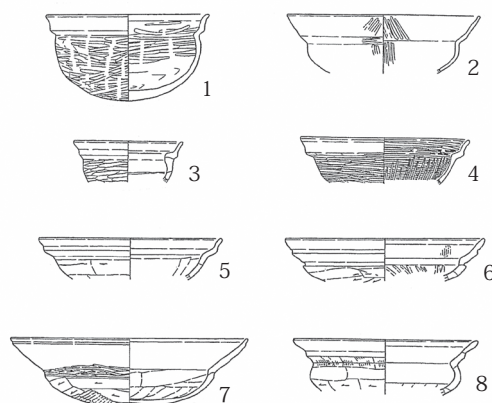
本稿で析出した布留式系鉢は、次山の「精製土器 B 群」、三好 玄の「Ⅰ群」(三好 2007・2010)に相当する精製土器の鉢である。問題は、山陰に由来するとされている、次山の「精製土器 A 群」、三好の「Ⅱ群」である⁶⁴⁾(同)。

ここでは、管見にふれえた限りではあるが、次山の「精製土器 A 群」、三好の「Ⅱ群」(同)に該当するかと思われる内面にケズリの施された鉢を、1 例あげておきたい(第 18 図 21)。これまで、単に「粗製の」鉢として見過ごされてきた可能性もあり、この種の鉢の特徴をさらに見極めるとともに、今後意識的な探索が必要であろう。

e 屈曲口縁鉢

総じて浅鉢様の器形で、口縁部が 2 段に屈曲ないしは屈折する鉢である。ほとんどが、混入する砂粒もごく細かい精良な胎土の、文字通りの精製土器である。畿内系の鉢、布留式系鉢の一種であることは間違いがないが、故地や出現の細かな経緯については、不明な点も多い。種々の名称が付されてきた鉢ではあるが、この鉢の形態的特徴を端的に表す「屈曲口縁鉢」(立花 1992)の呼称を用いる。

児玉地域は、これまで屈曲口縁鉢の出土例がない地域とされてきたが、近年相次いで類例が報告された(大谷・福田 2011、恋河内・藤根ほか 2018・



第 19 図 児玉地域の屈曲口縁鉢 (縮尺: 1 / 6)

2020)。

報告された屈曲口縁鉢は、いずれも破片であり、住居跡など時期が確定できる遺構から出土した例は僅少である⁶⁵⁾。このこと自体屈曲口縁鉢が日常雑器とは区別される何かしら特殊な用途をもつことを端的に物語るのであるが、同じ理由で、他器種との共伴関係から、屈曲口縁鉢の時間的な位置付けを限定することがむづかしくなっている。

唯一久下前地区 G 地点の河川跡から屈曲口縁鉢がややまとまって出土しており(第 19 図 5～8)、同河川跡の出土土器は、古墳時代前期末葉を主とし、前期後葉～末葉、中期前半にほぼ限られることから、屈曲口縁鉢の帰属時期を、おおむね古墳時代前期後葉～末葉に限定することができる。前期前葉～中葉の遺物を多く含む久下前地区 A1・C4 地点の河川跡から屈曲口縁鉢が一切出土していないことも、傍証とはいえないながらも、屈曲口縁鉢が時期的に限られることを示唆する材料とみることができる。

ただし、児玉地域出土の屈曲口縁鉢を仔細にみるなら、かなり多様であることも事実である⁶⁶⁾。この多様さが、屈曲口縁鉢が経たある時間的な幅を示す可能性もないではないが、例数が乏しいこともあり、現状では、本地域の屈曲口縁鉢がごく短期的にみられるとする見方を強く否定する事実は見当たらない。

また、全体的な器形としては、長口縁鉢 A3・A4 類の範疇に含まれる鉢でもあり、口縁部の屈曲の有無という違いが、用途の違いなどどのように結びつくのか、あるいは長口縁鉢 A3・A4 類との出現過程の違いなどの問題が課題として残されている。

f S 字鉢

S 字状に屈曲する口縁部の鉢を、S 字鉢とする(第

20 図 1 ～ 19)。法量的には、大半が小型・中型の鉢である。例数は、極々限られるが大型の S 字鉢もみられる (第 20 図 3)。この場合平底の S 字甕とみることできるが、便宜的に大型の鉢とみて⁶⁷⁾、議論を進める。S 字鉢は、以下のように分類できる。

A 類

平底の S 字鉢を、A 類とする (第 20 図 1 ～ 12・15 ～ 17・19)。仮に器高 9cm くらいを目安に、小型、中型の鉢を分けるなら、小型の鉢の方が量的に卓越するとみてよい。以下、S 字甕と同様に、外面の装飾的な横ハケの有無、差異や外面調整の違い、口縁部形態などにもとづき⁶⁸⁾、S 字鉢 A 類を、さらに細分する。

A1a 類 胴部上位、あるいは肩部に複帯 (ほとんどが 2 帯) の横ハケの施された S 字鉢のうち、横ハケが屈曲部に接して施された鉢を、A1a 類とする (第 20 図 1)。

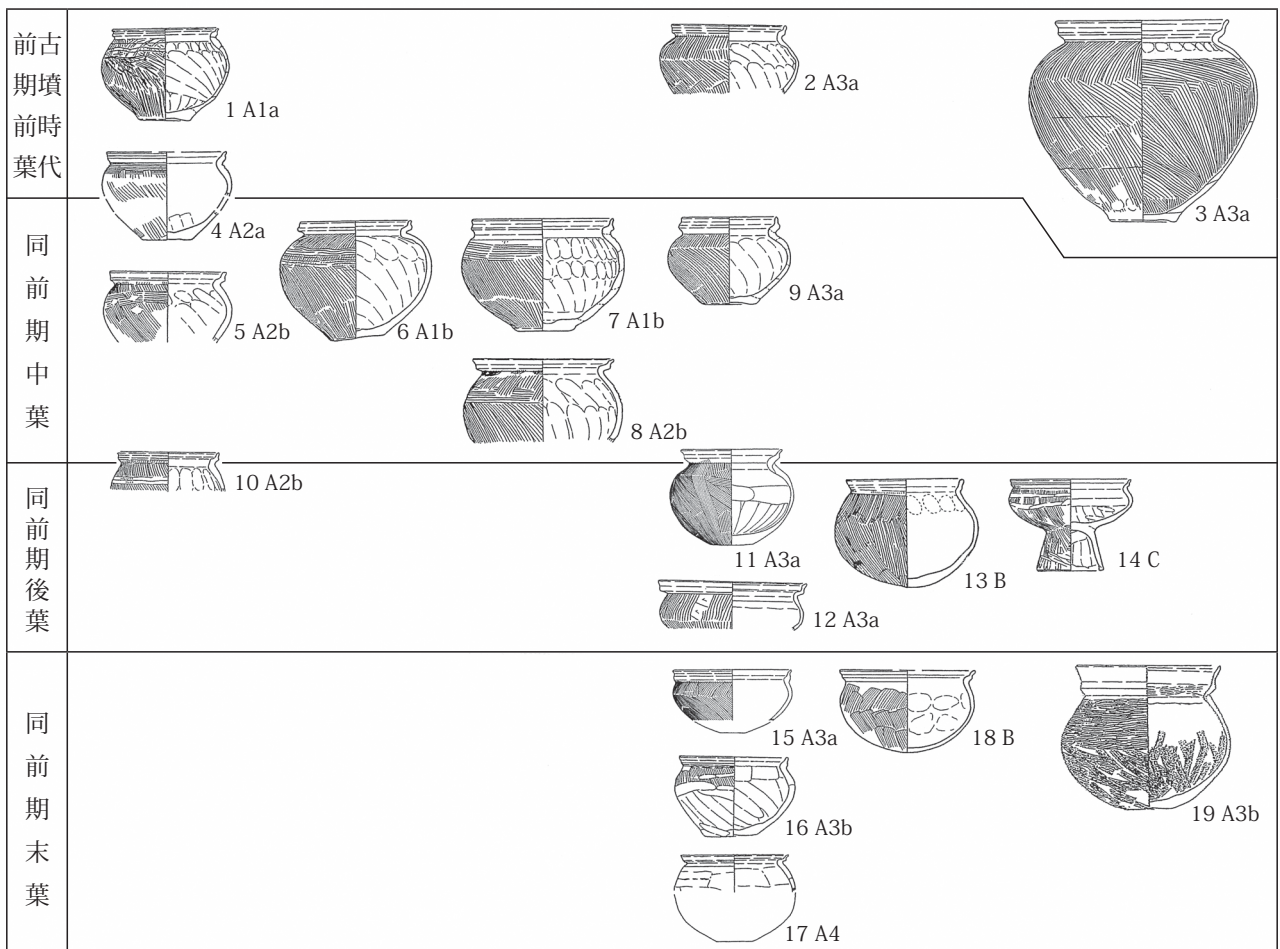
S 字甕同様に、この種の横ハケが肩部にみられる鉢は、胴部のハケメ、横ハケも条間の不揃いな粗いものが多い。

口縁部も最初の屈曲部以上がぶ厚く、端部付近の第 2 の屈曲部以上が短い、独特な形態のものが目立つようであり、端部の屈曲は、内側からの面取りに近い手法による例が卓越する。

A1b 類 胴部上位の横ハケが複帯の S 字鉢のうち、横ハケがくびれ部から離れ、より下位に加えられた鉢を、A1b 類とする (第 20 図 6・7)。口縁部形態は、上記した A1a 類と同様の特有の形態がみられるようである。

A2a 類 胴部上位の横ハケが、単帯、工具 1 本分となるが、くびれ部に接して加えられている S 字鉢を、A2a 類とする (第 20 図 4)。後張遺跡 E 地点の河川跡張出部という、古墳時代前期末葉～中期前半に出土遺物が限定される遺構出土例 (同上) (高林 2011: 第 22 図 67) 1 例のみであり、位置付けに苦慮する。胴部の横ハケの特徴から、一応前期前葉～中葉の位置付けを与えておく。

A2b 類 胴部上位の 1 帯の横ハケが、くびれ部を離れ、胴部中位に近い位置に加えられた S 字鉢を、



第 20 図 S 字鉢の変遷 (縮尺: 1 / 6)

A2b 類とする (第 20 図 5・8・10)。くびれ部以上が厚みを増す傾向も弱まるらしく、端部の内側からの面取りも目立たなくなるようである。

A3a 類 胴部上位に横ハケがみられず、ハケ調整のみで仕上げられた S 字鉢を、A3 類とし、そのうち胴部全面に斜位のハケが施されたものを、A3a 類とする (第 20 図 2・3・9・11・12・15)。

前期でも前葉～中葉の鉢は、口縁部形態も古い段階の特徴をとどめており (第 20 図 2・9)、前期後葉以降は、口縁部形態も屈曲の弱いものが多くなるのは (第 20 図 11・15)、S 字甕と同様である (本稿 (上): 第 4 図参照)。第 20 図 3 の大型の S 字鉢に関しては、前期前葉の土器が集中して出土している久下前地区 C4 地点河川跡から出土していること (恋河内・藤根ほか 2018: 第 326 図 127)、胴部内面のハケメなども考慮し、前期前葉の位置付けを考えた。

A3b 類 胴部にハケ調整が施されるのは A3a 類と同様であるが、ハケメが所々加えられず、多く下調整のケズリ跡が残された S 字鉢を、A3b 類とする (第 20 図 16)。口縁部の屈曲が微弱である。19 は、胴部上位に布留式の特徴である細かい横位のミガキが加えられている。異例ではあるが、本類に含めておく。

A 4 類 胴部外面がナデ、ケズリなどで仕上げられた S 字鉢を、A4 類とする (第 20 図 17)。

B 類

丸底の S 字鉢を、B 類とする (第 20 図 13・18)。畿内系の丸底鉢との融合例であろう。外面のハケメや内面の指押さえなどは、S 字甕、S 字鉢の手法を踏襲している。

C 類

台付の S 字鉢を、C 類とする (第 20 図 14)。類例は極めて少ない。小型の S 字甕とみることできるが、低平な鉢特有の器形であり、台付 S 字鉢とみた。外面調整のハケメにも空隙が目立ち、粗略化しているようである。

以上記した分類にもとづき、S 字鉢の時間的な推移を推定するなら、おおむね通常の S 字甕と同じ推移の軌道を描くとみて、さほど無理はない⁶⁹⁾。

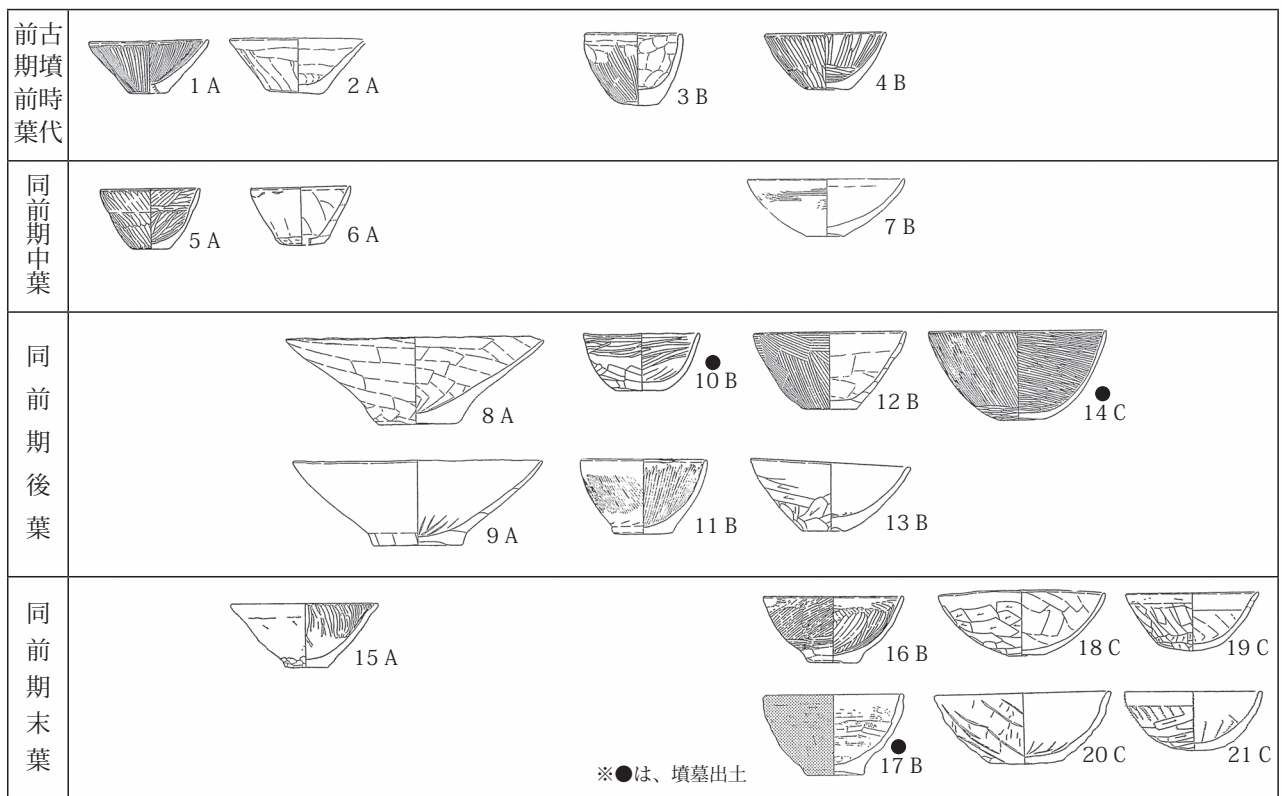
g 直口縁鉢

口縁部に屈曲などのない単純口縁の鉢は、「単口縁鉢」と称するのが相応しいが、すでに用いた「短口縁鉢」と同音であり、ひとまず「直口縁鉢」と呼称しておく。器形にもとづく分類のみ示す。

A 類

体部が直線的に開く直口縁鉢を、A 類とする (第 21 図 1・2・5・6・8・9・15)。

通常の法量の鉢に加え、大型の鉢がみられる (第



第 21 図 直口縁鉢の変遷 (縮尺: 1 / 6)

21 図 8・9)。ただし、8・9 の大型鉢は、あるいは大型壺などの分割成形時に生み出された副産物であろうか。例数が限られるため、断定的なことはいえないが、A 類自体は、総じて前期でも前半に多いようにも見受けられる。

B 類

体部がゆるやかな丸みをもち開く直口縁鉢を、B 類とする (第 21 図 3・4・7・10～13・16・17)。

A・C 類との違いは、わずかであり、どちらともいいがたい鉢も含まれるが、おおむね底部が体部から突き出たものが多く (同 11・16・17)、凹み底 (同 4・7・13・16・17) も多いようである。内外面にミガキが目立つ例 (同 4・10・11・16) や赤彩例 (同 17) に関しては、樽式・樽式系の鉢 (本稿：1・2 頁) である可能性も残るが、厳密に区別するのはむづかしいようである。

C 類

体部全体が丸みをもって立ち上がる直口縁鉢を、C 類とする (第 21 図 14・18～21)。いわゆる碗状、あるいは「ボウル」のような器形の鉢であり、体部から底部にかけても境目が不明瞭で、丸く収まるものが多いようである。

直口縁鉢は例数が乏しいため、時間的な推移を順を追ってとらえることはできそうにないが、大まかな傾向は推定できそうである。前期前葉・中葉には顕著な傾向はみられないが、後葉以降、B 類が主となり、末葉にかけて C 類が増加するという傾向である。

4 有孔鉢の分類と編年

有孔鉢は、とくに古墳時代中期以降、中・大型甕に対応する大型甕と対をなす小型の「蒸し器」、小型甕と考えられてきた器種である。出土数が不規則で少なく、「蒸し器」としての使用痕跡、状況証拠が乏しいことなどから、甕であることに疑義が唱えられている (大木 1997、小林 2017 ほか)。現状では、この考えに異を唱える積極的な証左はみられないため、ここでは「有孔鉢」の呼称を用いる⁷⁰⁾。

法量的には、例外なく通常の鉢よりやや大振で、中型の鉢とも呼べる大きさのものがほとんどであり、一時にある一定の決まった量の液体なり、何なりを処理することに特化した、特別な機能を担う容器であることがうかがえる。

有孔鉢を、器形を主に、口縁部の造作や調整も加味して、以下の A～D 類に分類し、時間的な推移を跡

付けることにしたい⁷¹⁾。

A 類

赤井戸式の有孔鉢を、A 類とする (第 22 図 2・6)。器形的には、以下記す C 類と変わらないが、口縁部外面に輪積の段を痕跡的に残したり、独特の粗いナデやケズリが施される特徴などにより識別できる。

第 22 図 6 は典型例としうるが、2 の場合、端部の内面に輪積痕が残るなど、やや異例である。ただし、2 の内外面のナデは、この段階の赤井戸式土器と共通するものである。

B 類

体部が直線的に開く器形の有孔鉢を、B 類とする (第 22 図 4・7・8・14～16)。

B 1 類 B 類のうち、単純口縁のものを、B1 類とする (同図 4・7・8・16)。4 のように、口縁部が内屈するものを含む。内外面の調整は、ミガキやハケである。底部の穿孔にも、大小がみられるようである。

B 2 類 口縁部外面に粘土紐を貼り合わせ、押し、折返し口縁状にするものを、B2 類とする (14・15)。口縁部の粘土紐の圧着には、指頭が用いられ、粘土紐下半には、独特の押圧痕が連続する。

C 類

体部がゆるやかな丸みをもち立ち上がる有孔鉢を、C 類とする (第 22 図 3・5・9～12・17・18)。

C 1 類 C 類のうち、単純口縁のものを、C1 類とする (同図 3・5・9・10・12・17・18)。内外面の調整や底部の穿孔の大小など種々あるが、器形や法量には、規格性が高いように見受けられる。

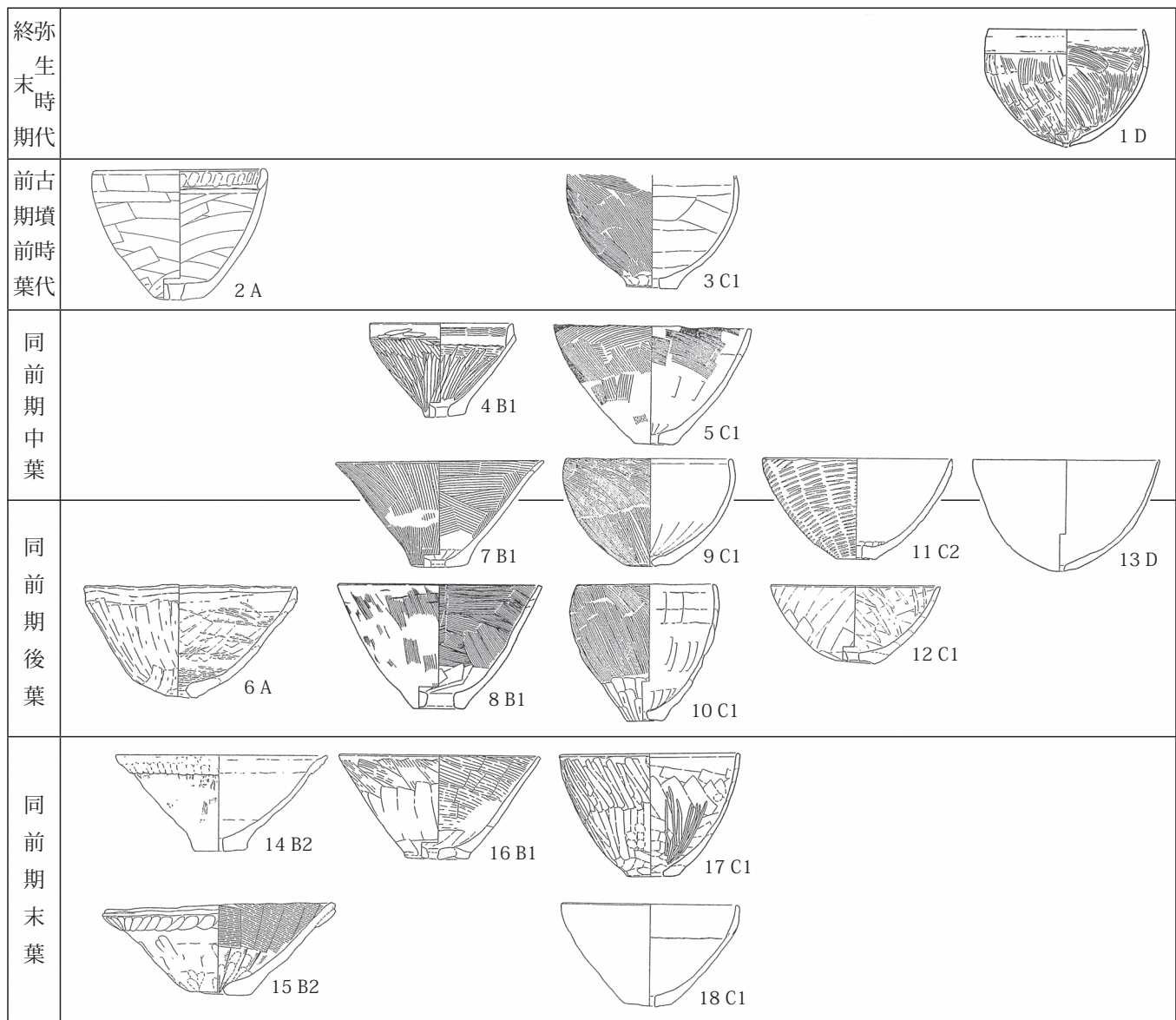
C 2 類 C 類のうち、外面の整形・調整にタタキを用いるものを、C2 類とする (第 22 図 11)。

D 類

体部の形態は、C 類と大きく異ならないが、底部が丸く収まり、焼成前に穿たれた孔が小さいものを、D 類とする (第 22 図 1・13)。類例は、ほぼ第 22 図に掲げた土器に尽きる。C1 類とした 9 の土器も、底面の孔が小さい点で、D 類との結びつきが考えられる有孔鉢である。

有孔鉢の出現の問題はさておき、弥生時代終末期以降の変遷について、推定できる範囲で記しておく。

まず、弥生時代終末期であることが確かな有孔鉢は、現状では、D 類の 1 例のみである (第 22 図 1)。D 類に関しては、形態および小さな穿孔の特徴からみて、北陸系あるいは山陰系の有孔鉢と考えてよいであろう。1 の有孔鉢は、「月影式」の甕と共伴する資料であり (長滝・中沢 2005：第 108 図 62)、そうした脈



第 22 図 有孔鉢の変遷 (縮尺：1 / 6)

絡で理解することができるのかもしれない。

古墳時代前期前葉の例も少ないが、赤井戸式の系統の有孔鉢 (第 22 図 2) がみられることが注意される。続く前期中葉～後葉には、丸みの強い C 類がかなりの比率を占めるらしく、末葉には、中期前葉の有孔鉢とほとんど異ならない B2 類 (14・15) が出現するというような大まかな粗筋をたどることができそうである。

5 高坏の分類と編年

高坏は、形態、製作手法からみて、有稜高坏、柱状脚高坏、小型埴形高坏、畿内系高坏、山陰系 (あるいは

北陸系) 高坏、低脚高坏 (低脚坏) の 6 種に大きく括ることができる。時期的な違いもあるが、このうち該期の高坏の大半を占めるのは、有稜高坏、柱状脚高坏、小型埴形高坏の 3 種である。

以下、それぞれの高坏を分類し、編年の概略について記すことにしたい。なお、類似した器形の高坏があることもあり、弥生時代終末期の樽式の高坏についても瞥見する。

a 樽式高坏

やや深めの埴形の坏部を有する高坏である (第 23 図 1)。後述する小型埴形高坏との違いは、坏部が大きいことであるが、内外面のミガキが不規則であるこ

となど違いがあり、一律一様ではない。現状では、児玉地域で明確な例は、弥生時代終末期までである。

b 有稜高坏

「有段高坏」、「有稜開脚高坏」とも呼称される、坏部の下部が稜あるいは段をなし屈折し、脚部が開く器形の高坏である(第23図2～23)。以下のように、坏部下部の稜が明瞭か不明瞭かによりA・B類の2群に大きく分け、変遷を略述する。有稜高坏の変遷、時間的な推移に関しては、柱状脚高坏とともに、まとめて論じることにはしたい。

なお、脚部の形態については、有稜高坏だけでなく、柱状脚高坏など他の高坏および器台についても、下記に記す分類を用い、坏部の形態分類に加えて、例えば、「Aa」、「B1b」のように表記する。

- a：直線的に開く脚部を、「a」とする。
- b：上半は、わずかに外反あるいは直線的に開き、下半が微妙に内彎しつつ開く脚部を、「b」とする。下半の内彎は軽微であり、以下に記す「d」との違いがわずかなものも含まれる。
- c：上半は、わずかに外反あるいは直線的に開き、下半が強く内彎しつつ開く脚部を、「c」とする。
- d：外反しながら開く脚部を、「d」とする。
- e：下半あるいは下端で屈曲、屈折して開く脚部を、「e」とする。

A類

坏部下半の稜が微弱かあるいはほとんどみられない高坏を、A類とする(第23図7・8・14)。

A1類 A類のうち、坏部が直線的に開くものをA1類とする(第23図8・14)。

A2類 A類のうち、坏部が内彎しながら開くものを、A2類とする(第23図7)。7の高坏は、内外面のミガキ、ナデが比較的整っている点以外、器形など同図1の樽式とした高坏に類似しており、あるいは折衷例になるのかもしれない。

B類

坏部下半の稜が明瞭な有稜高坏を、B類とする(第23図2～6・9～13・15～22)。

B1類 B類のうち、坏部が直線的に開くものを、B1類とする(同図6・13)。「直線的」といったが、より正確にいうなら、彎曲あるいは内彎がごく微弱なものというべきであろう。13の高坏では、坏部は下半がわずかに内彎し、上半は微妙に外反しているようである。

B2類 B類のうち、坏部がとくに深いものを、B2

類とする(同2・3)。2の高坏の場合、坏部が深いだけでなく、碗状を呈する。内面の調整方向をたがえたミガキも特徴的である。3の高坏坏部は、2ほど彎曲しないが、赤彩されている。

B3類 坏部が、B2類に比べ浅く、下記B5類より深い高坏のうち、内面調整が、B2類やB5類と同様に縦のミガキに限られるものを、B3類とする(同4・5・12)。12は、脚部に穿孔がなされず、脚部中位から明瞭に内彎する形態である。

B4類 坏部の形態はB3類と同様であるが、とくに内面調整のミガキが装飾的に施されるものを、B4類とする(同9～11)。

「装飾的」といったが、9のように縦・斜めのミガキが向きを変えて施されるもの、10・11のように坏部内面の上半と下半でミガキが方向を変えて矢羽根状に施されるものなど、何種類かあるようである。2・16のように、見方によっては「装飾的」なミガキとみえるものもあるが、それらは除いた。

10・11の坏部内面に「矢羽根状」のミガキの施された高坏は、赤塚次郎が、内面に横位の多条沈線を巡らす高坏とともに例示した「西濃型高杯」に類似している(赤塚1997：80・81頁および第9図)。

B5類 B3・B4類に比べ、坏部がやや浅いものを、B5類とする(同16～18・20・22)。坏部の深淺という基準の代わりに、B3・B4類とB5類との違いは、後者の方が口径／坏底面径が大きく、坏部の開きが大きいことを区分点としてもよいであろう。16は、B5類としたが、内面のミガキには、「装飾性」が残るようである。

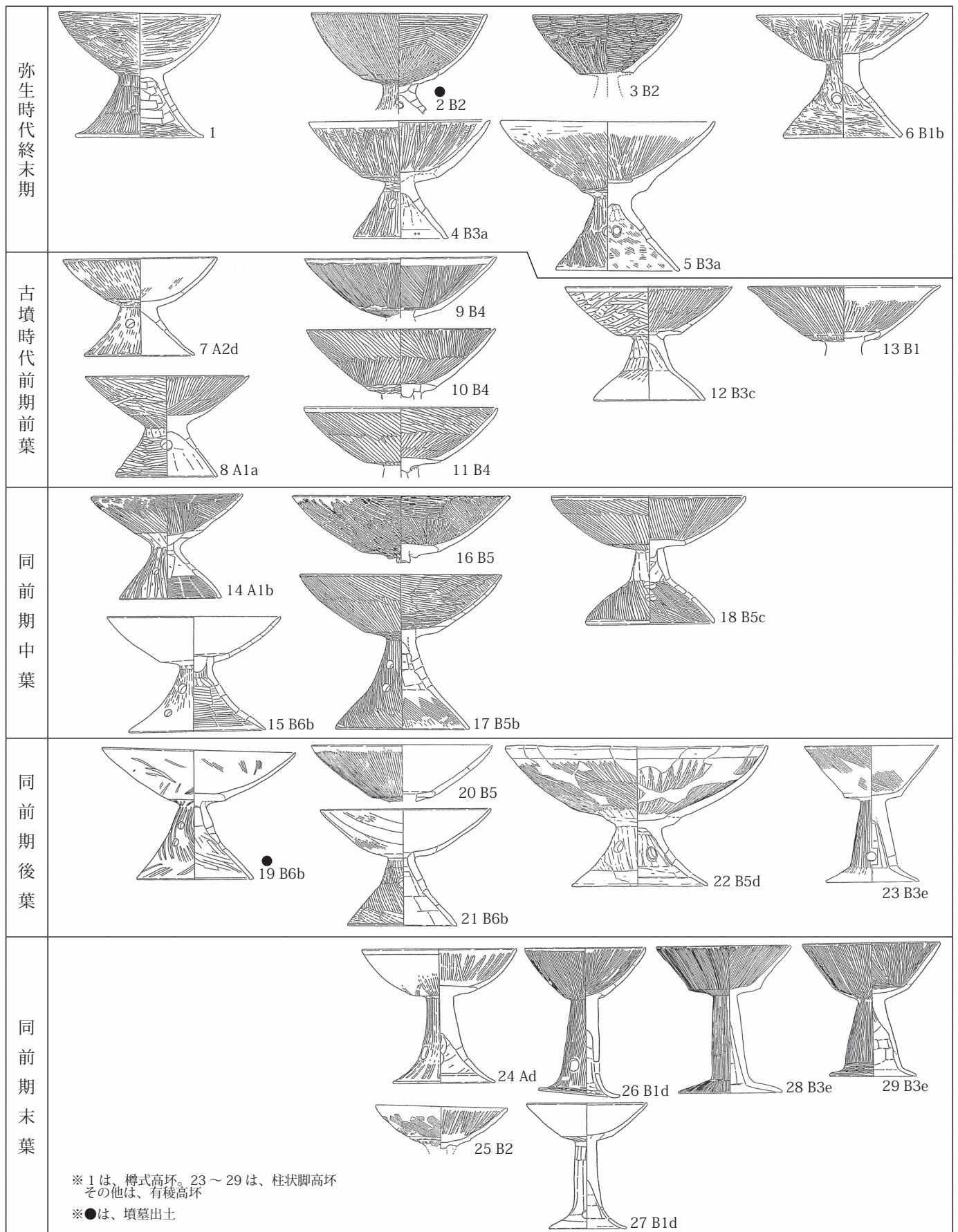
B6類 器形は、B5類と大きく変わることがないが、内外面の調整にミガキが用いられず、ほぼナデにより仕上げられたものを、B6類とする(同15・19・21)。

c 柱状脚高坏

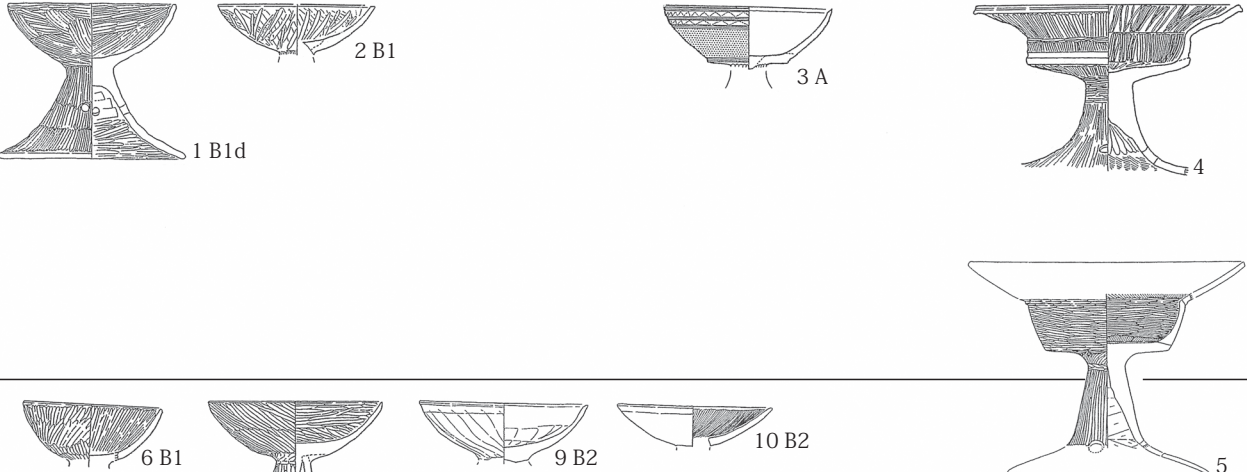
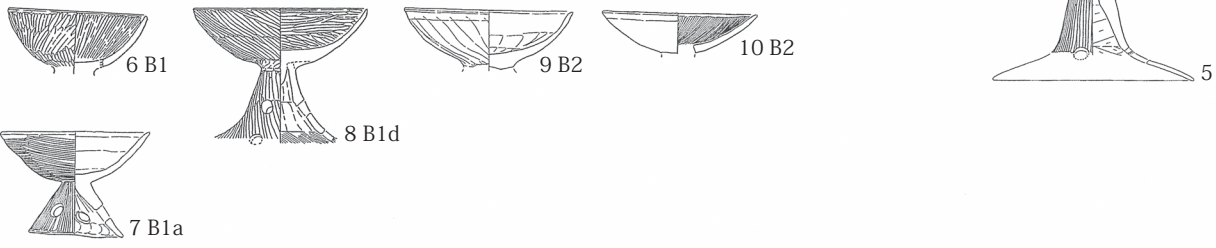
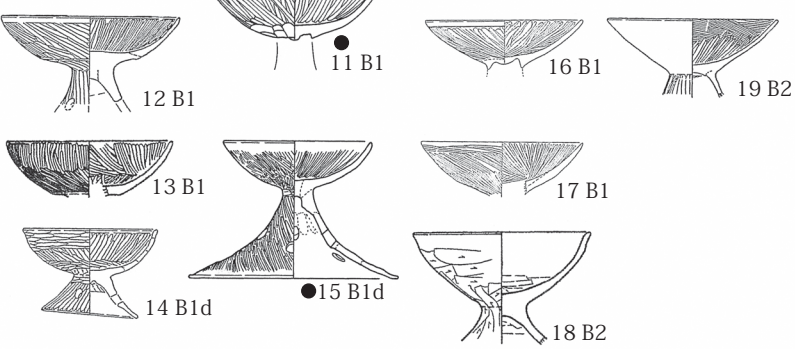
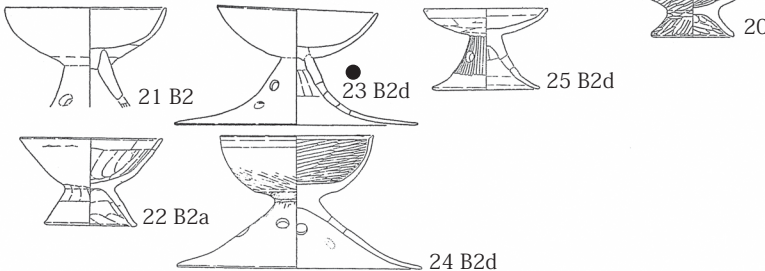
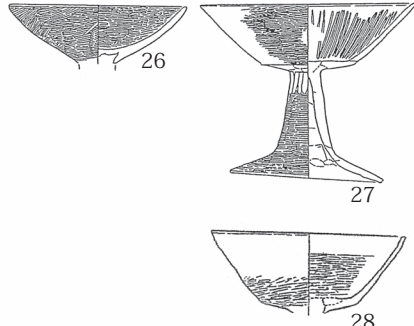
脚部が細く柱状をなす形態の高坏である(第23図23～29)。柱状の脚だけでなく、有稜高坏などに比べ、坏部径が小さいことも特徴である。坏部の形態にもとづきA・B類の2類に大きく分け、先に記した脚部形態のa～eの分類を付加する。脚部に関しては、中実かどうかなど製作手法の違いに関連する違いがあり、細かな分類が可能であるが、簡易な分類にとどめる。

A類

下半の稜が不明瞭で、坏部が碗状を呈する柱状脚高坏を、A類とする(第23図24)。24の脚部形態は、



第 23 図 樽式高坏、有稜高坏、柱状脚高坏の変遷（縮尺：1 / 6）

弥生時代終末期	
古墳時代前期前葉	
同前期中葉	
同前期後葉	
同前期末葉	 ※ 1 ～ 3 ・ 6 ～ 19 ・ 21 ～ 25 は、小型埴形高坏 ※ ● は、墳墓出土

第 24 図 小型埴形高坏、畿内系高坏他の変遷（縮尺：1 / 6）

脚柱から裾部にかけて滑らかに開く d である。脚部のやや低い位置に、円形の透かし孔が穿たれている。

B 類

坏部下半に稜を有する柱状脚高坏を、B 類とする (第 23 図 23・25～29)。

B 1 類 B 類のうち、坏部下半の稜が微弱なものを、B1 類とする (第 23 図 26・27)。26・27 の脚部形態は d であり、円形の透かし孔がみられる。A 類を含めて、脚部形態 d および円形の透かし孔との結びつきが強いかもしれない。

B 2 類 B 類のうち、坏部下半の稜が軽微であることは B1 類と同じであるが、坏部底面が円盤状をなすものを、B2 類とする (第 23 図 25)。古墳時代中期前半に坏部底面が円盤状をなす高坏があり、製作手法としても、その種の高坏と直結する高坏であることは間違いない。

B 3 類 B 類のうち、坏部下半の稜が明瞭なものを、B3 類とする (第 23 図 23・28・29)。坏部や脚部の形態はかなり多様であるだけでなく、内外面の調整などにも、23 のように粗略なもの、28・29 のように密なミガキを施すものと種々あるようである。23 のように脚柱に円形の透かし孔を有するものも少数みられる。脚部の形態は、e が大半のようである。

有稜高坏、柱状脚高坏の変遷を概観しておきたい。

まず、東海西部を起源とする有稜高坏についてであるが、弥生時代終末期に、有稜高坏の流入の第 1 段階ともいべき画期があるのは間違いない。この段階、B1 類とした坏部が直線的な高坏や B2 類とした坏部の深い高坏や赤彩された高坏のように、東海西部の高坏とは、いささか異なった高坏が多々みられるようである⁷²⁾。それに関係するのか、内外面のミガキなどの調整方向なども一律一様ではないように見受けられる。

古墳時代前期前葉には、有稜高坏の器形や調整にみられる多様性はいくらか減じて、ある種のまとまりがみられるようになる。一方内面の矢羽根状のミガキ (第 23 図 10・11) など、有稜高坏の故地を物語る明瞭な特徴も、この段階に限ってみられる。脚部形態 c とした、脚部中位から強く内彎して膨らむ形態の脚部は、前期前葉と次段階、中葉にほぼ限定できるようである (同 12・18)。

前期中葉には、前期前葉に比し、総じて有稜高坏の坏部が浅くなり、内面の装飾的なミガキがほとんどみられなくなることが特徴としてあげられる。内外面のミガキに変わり、ナデ調整が用いられはじめるのも

(15)、この段階からであろう。

前期中葉から続く坏部が浅くなる傾向は、前期後葉まで続く。この器形変化の傾向は、後葉では、坏部底面が小さくなり、外稜が不明瞭になるとともに、坏部の彎曲も微弱になる変化、全体的に器形のめりはりが失われる変化としてなぞることができる。この変化に連動して、内外面のミガキが省略され、ナデに取って代わられる粗略化が進行する (19・21)。

前期後葉には、坏部が分厚い作りで、大型化した例 (12) もみられるようになるが、12 の高坏は、旧赤根川流域の集落跡、田端南堂遺跡 (大熊・知久 2010) 出土であり、赤井戸式土器が残存する一帯の変則的な例とみられる。

柱状脚高坏が古墳時代前期末葉に盛行することは明白であるが、その出現過程や来源となる地域、地方については、未だに多く推定の域を出ないのが実状であろう。

柱状脚高坏に関しては、B3 類とした高坏の中に、古墳時代前期後葉に遡る例がみられる (第 23 図 23)。23 の高坏は、全体的な器形は、柱状脚高坏というより後段で触れる布留式系高坏 (第 24 図 28・29) や中期の高坏に類似しており、しかも分厚い作りの脚部に円形の透かし孔がみられるなど、位置付けに苦慮する高坏である。

内外面の調整など有稜高坏と大きく異なる点を勘案するなら、23 の高坏については、布留式系高坏の一種の模倣、整形・調整手法などの細かな技術やそれらについての知識を欠いた外観だけの模倣とみるのが、ひとつの見方であろう。この場合、土器製作に関する細部にわたる技術や知識、情報が伝達されることなく、模倣行為が始まったような状況を想定することになる。そうした謂わば見よう見真似の段階に続いて、前期末葉には、ほぼ柱状脚高坏のみに一新されることになる。有稜高坏と柱状脚高坏の共伴例がほとんどみられないことからみて、有稜高坏から柱状脚高坏への交代は、極めて短期間に進行したと考えて間違いない。

d 小型埴形高坏

小型の埴形高坏 (1～3・6～19・21～25) は、器形や整形・調整手法などにも種々あるが、出土資料数が限られるため、時間的な推移の傾向を捉えることが容易ではない。ここでは、ごく大まかな類別にとめることにする。

A 類

第 24 図 3 の 1 例のみである。坏部下半に稜を有す

る形態で、外面口縁部沿い、坏底部には、櫛描の横線が施され、口縁部の横線間には「不連続山形文」が付されている。内外面の調整はミガキ、外面のみ赤彩されているようである。

B 類

小型無文の埴形高坏を、B 類とする (第 24 図 1・2・19・21～25)。外面調整におけるミガキの有無を基準に、2 類に分ける。

B 1 類 B 類のうち、外面調整がミガキを主とするものを、B1 類とする (第 24 図 1・2・6～8・11～17)。

B 2 類 B 類のうち、外面調整のミガキが不明瞭でナデが主となるものを、B2 類とする (第 24 図 9・10・18・19・21～25)。

小型埴形高坏については、器形や器面の仕上げなどとりわけ多様な弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけての段階を経て、古墳時代前期中葉から後葉にかけては、ミガキの省略などが進行する時間的な推移を跡付けることができる。また、前期中葉以降には、脚部が下端に向かって大きく開く例が目立つようである (第 24 図 15・23・24)。現状では、児玉地域では、古墳時代前期末葉と確言できる資料はみられない。

e 畿内系高坏

畿内地方に由来すると考えられる高坏、いわゆる「畿内系高坏」のうち、庄内式期に盛行する高坏を A 類、布留式期に通有の高坏を B 類とする⁷³⁾。

A 類

坏部上半が屈折して開き、脚部も中位より屈折あるいは屈曲して開く高坏である (第 24 図 4・5)。4 の高坏の端部や坏底部外面には、装飾的なナデが加えられている。

B 類

外面の細かな横位のミガキを特徴とする高坏のうち、坏部下半に稜を有したり、埴状の坏部の高坏を、B 類とする (第 24 図 26～28)。

B 1 類 B 類のうち、坏部下半に稜を有し大きく開き、脚部も中位より屈折して開く高坏を、B1 類とする (第 24 図 27・28)。

B 2 類 B 類のうち、坏部下半に稜のない埴状の高坏を、B2 類とする (第 24 図 26)。

A 類に関しては、共伴する土器から、おおむね弥生時代終末期から古墳時代前期前葉にかけての時期に限定されるとみられる。

B 類については、まず吉備系の精製土器に由来する

とされる細かな横位のミガキ (次山 1993) の施された土器は、高坏だけでなく小型壺、鉢や器台に及ぶが、いずれも確実な例は、古墳時代前期末葉にほぼ限定できる。

また、第 24 図 27 の高坏は、古墳時代前期末葉から同中期前半を主とする遺物が多量に出土した久下前地区 G 地点の河道跡出土土器 (恋河内・藤根ほか 2020：第 156 図 15) である。細かい特徴的なミガキが明瞭に残る点から、古墳時代前期末葉の高坏である可能性が高いとしてよいと思う。28 の高坏は、横位のミガキが部分的であり、あるいは中期前半まで下るのかもしれない。

B2 類とした 26 の高坏は、横位の細かなミガキの特徴から、畿内系としたが、器形的には、柱状脚高坏あるいは小型埴形高坏になるのであろう。

f 低脚高坏

1 例のみではあるが、山陰地方に特徴的ないわゆる低脚坏 (低脚杯) に類似した脚部が低く小さい高坏 (第 24 図 20) が、久下前地区 C4 地点の河川跡から出土している (恋河内・藤根ほか 2018：第 322 図 62)。

山陰の低脚坏は、通常 20 の高坏より口径が大きく浅い高坏が多いが、時期的に下る資料、あるいは地域的な変容例の中には、20 のように、埴状の坏部を有する例もみられるようである。河川跡出土であり、時期限定の材料を欠くが、暫定的に可能性のある時期に位置付けておく。

6 器台の分類と編年

古墳時代前期の器台について、小型器台、装飾器台、鼓形器台の 3 種に分け、これまでの研究の蓄積 (書上 1994、今平 2012、笹森 1989、利根川 1999b ほか) を参考にしながら、児玉地域における変遷の概要を記すことにしたい。

a 小型器台

出土遺物として通有の器台を指して「小型器台」とし、主に器受部の形態に基づき A～F 類の 6 類に大きく分ける。A～F 類の各類別に、外面調整、とくに器受部の外面調整がミガキを主とするものを「1」、ミガキが不明瞭でナデが主となるものを「2」とし、A1 類、A2 類、B1 類、B2 類などとする。また、脚部に関しては、高坏と同じ a～e の分類 (本稿：13 頁) を用い、A1a 類、A2d 類のように呼称する。

A 類

器受部が屈曲、屈折せず直線的に、あるいは外反して開く形態の小型器台のうち、本稿の小型器台 F 類(いわゆる「X 字形器台」、「X 器台」)⁷⁴⁾を除いたものを、A 類とする(第 25 図 1～3・5・10～12・16・17)。

A 1 類 A 類のうち、器受部の外面調整がミガキを主とするものを、A1 類とする(第 25 図 1～3・5・11・16)。1・3 は、ともに直線的に開く脚部 a であり、器受部・脚部接合部の貫通孔がみられない。

A 2 類 A 類のうち、ミガキが不明瞭でナデが主となるものを、A2 類とする(第 25 図 10・12・17)。

B 類

器受部がゆるく彎曲しながら開く形態の小型器台を、B 類とする(第 25 図 4・6・7・13・18～20)。

B 1 類 B 類のうち、器受部の外面調整がミガキを主とするものを、B1 類とする(第 25 図 4・6・7・18・19)。

B 2 類 B 類のうち、ミガキが不明瞭でナデが主となるものを、B2 類とする(第 25 図 13・20)。20 には、器受部・脚部接合部の貫通孔がみられない。

C 類

器受部が塊状を呈する小型器台を、C 類とする(第 25 図 15・24)。例示した器台は、いずれも外面調整がナデや一種のケズリであり、C2 類に相当する。15 の器台は、脚部中位以下が内彎気味となる稀少例である。

D 類

器受部がゆるく彎曲しながら開く点は、B 類とほとんど同じであるが、器受部の端部がわずかに屈曲あるいは屈折する小型器台を、D 類とする(第 25 図 8・9・14・21～23・29)。器受部内面は、ゆるやかに彎曲し、外面の屈折部にのみ比較的明瞭な稜がみられる。屈折の多くは、器受部口端をつまみ上げたり、外面を強く横ナデすることで生じているようである。

D 1 類 D 類のうち、器受部の外面調整がミガキを主とするものを、D1 類とする(第 25 図 8)。D1 類が稀少なのは、屈折部が器受部の大半を占めるため、ミガキを加える余地が乏しいことと関係しているのであろう。

D 2 類 D 類のうち、ミガキが不明瞭でナデが主となるものを、D2 類とする(第 25 図 9・14・21～23・29)。21 の器受部端部外面には、横ナデによる細かな凸凹がみられる。9 には、器受部・脚部接合部の貫通孔がみられない。

E 類

器受部が屈折して外反気味に開く形態の小型器台を、E 類とする(第 25 図 25～28・30・31)。器受部の外面観はほとんど D 類と変わらないが、D 類では、外面が屈折するにもかかわらず内面は塊状の丸みをもっているのに対して、E 類では、器体全体が屈折して口縁部が開く点が異なるようである⁷⁵⁾。

E 1 類 E 類のうち、器受部の外面調整がミガキを主とするものを、E1 類とする(第 25 図 25・26)。25・26 の脚部は、F 類とした「X 字形器台」と同様に直線的に開く脚部 a であり、器肉が薄く、極めて精製のである。

E 2 類 E 類のうち、ミガキが不明瞭でナデが主となるものを、E2 類とする(第 25 図 27・28・30・31)。28 も脚部がごく薄手で、精製のである。

F 類

器受部、脚部が直線的に開く、いわゆる「X 字形器台」、「X 器台」を、F 類とする(第 25 図 32～35)。例示した器台は、外面調整がナデに類するようであり、F2 類に相当するようである。32 の器台のみ薄手であり、器形も他と異なり、より原型に近いとみることができる。33～35 は、器受部、脚部ともに短くなっているとともに、内外面の調整も粗略化しており、変容例とみられる。

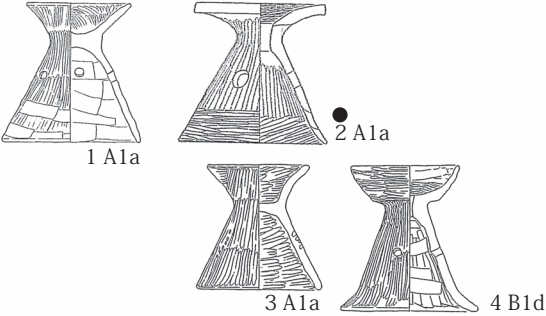
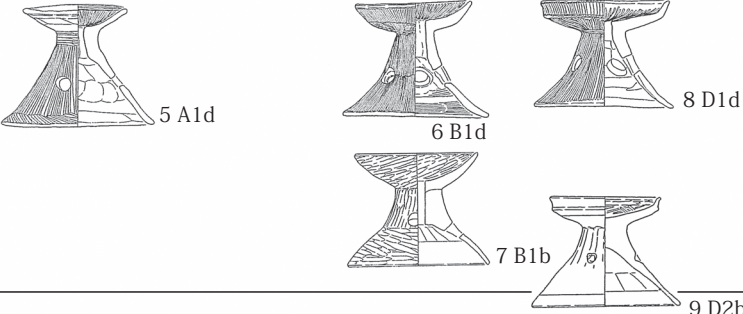
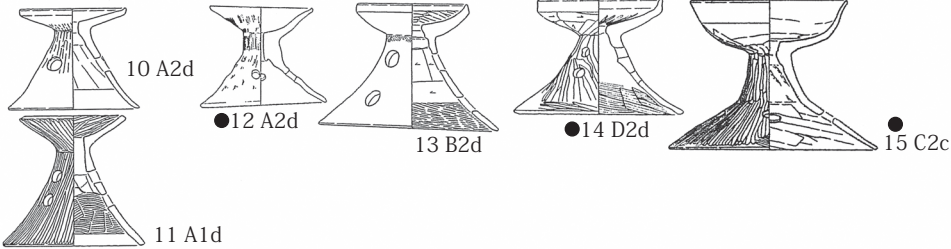
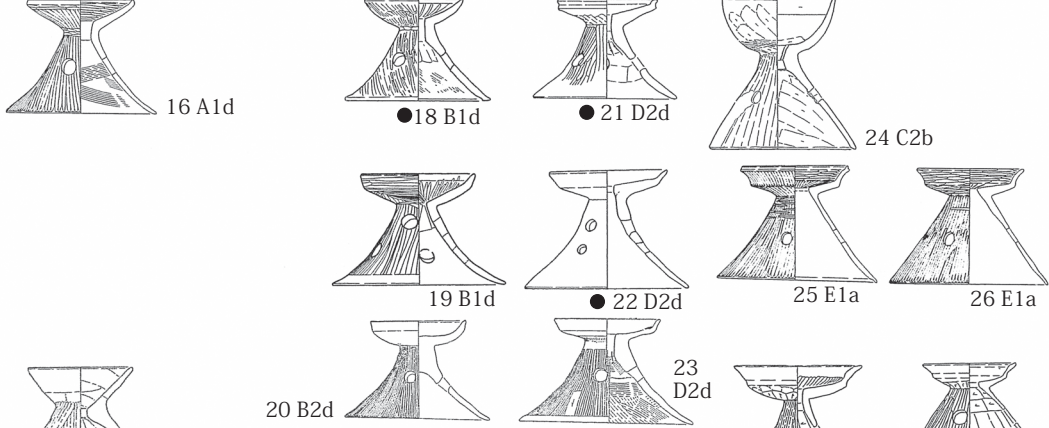
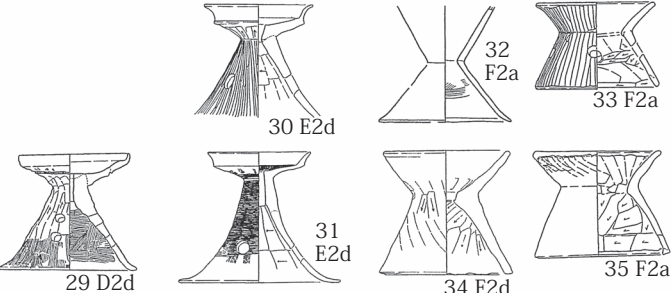
小型器台の時間的推移に関して略述する。

資料に限られるが、弥生時代終末期に、おそらく東海西部などの影響下で、A1a 類(第 25 図 1～3)のような次段階以降みられない器台が出現するところから始まる。脚部 a は、この段階の器台と古墳時代前期後葉、終末期の E 類の一部(第 25 図 25・26・28)および F 類(第 25 図 32～35)にほぼ限られる脚部形態である。この段階にも、次段階以降盛行する B 類の器台(第 25 図 4)がみられることにも注意したい。

古墳時代前期前葉には、D 類がみられるようになる(第 25 図 8・9)。前期前葉から後葉までは、全体として外面調整の粗略化の軌道に沿ってミガキからナデへの簡略化を伴いつつ B・D 類が、器台の主要構成器形となる。

前期前葉の今一つの特徴を上げるとすれば、この段階脚部が総じて短く、全体に小振りであることが指摘できる。また、例外はあるものの(第 25 図 24)、わずかに内彎する脚部 b(第 25 図 7・9)、中位から内彎する脚部 c(第 25 図 15)は、この段階と次の前期中葉におおむね限られるといつてよい。

前期中葉には、C 類が加わり(第 25 図 15)、前葉

弥生時代終末期	
古墳時代前期前葉	
同前期中葉	
同前期後葉	
同前期末葉	

※●は、墳墓出土

第 25 図 小型器台の変遷（縮尺：1 / 6）

に比べ、ミガキの省略、ナデ調整が多用される傾向が進むようである(第25図10・12～15)。脚部の裾がゆるやかな曲線を描き開く脚部dが多くを占めるようになる。前期前葉に比べ、裾部の広がりが大きくなるが、この傾向は、前期末葉まで進捗する。

前期後葉には、E類が出現する(第25図25・26)。25・26の2個体は、E1a類であり、脚部形態aは、F類と共通する。E類がF類、「X字形器台」とも深く関わることを物語っている。28の器台を含め脚部が極めて薄い作りの精製的な器台である点は、原型とのある種の近さに由来するのであろう。原型の候補としては、山陰系の器台が挙げられる。

前期末葉には、F類、「X字形器台」がみられるようになる(第25図32～35)。他には、E類の器台が多いと推定される(第25図30・31)。30・31は、ともにE2d類であり、31は、脚裾部が著しく伸長し、脚部外面に細かな横ミガキが加えられるなど、前期末葉の典型例かつ畿内系の要素のみられる特異な例である。小型器台の脚部が時期を追って伸長し、末広がりとなる傾向は、笹森紀己子が指摘した顕著な時間的変化である(笹森1989:154-165頁)。

b 装飾器台

装飾器台と称したのは、「特殊器台(形土器)」、「結合器台(形土器)」などとも呼称されてきた器台である。以下に装飾器台の分類と変遷について略説することにした。

分類に関しては、器受部の形態によりA～Dの4類に、器受部外面の透かし孔の有無を基準に、透かし孔を有するものを「1」、透かし孔のないものを「2」とし、A1類、B1類などとした。また、脚部に関しては、残存する資料に関しては、いずれもゆるやかに外反しながら開く、高坏と同じ分類の脚部d(本稿:13頁)であるため、分類項目から除いた。

部位の呼称については、高坏の坏部状に開く本体を、「器受部」と呼び、器受部下底の底状の出っ張り部分を、「突出部」と呼称する。なお、突出部を含む、脚部より上の部分総体を、「器受部」と呼ぶ場合もある。

A類

器受部がゆるやかな曲線を描き外反し、突出部の端部がつまみ上げられ、総じて底状に大きく突き出た形態の器台を、A類とする(第26図2～5)。突出部の端部には、横ナデによる平坦面がみられる。2・4・5は、器受部・脚部接合部の貫通孔がみられない。

A1類 A類のうち、器受部の中位に円形の透かし

孔がみられるものを、A1類とする(第26図2・3)。2の脚部の円形の透かし孔は、「二段三方(互い違い)」(宮井2011:25頁)の6箇所に通されているようである。

A2類 A類で、器受部に透かし孔のないものを、A2類とする(第26図4・5)。4の場合、貫通孔、透かし孔ともにみられない。A2類には、内面調整が粗略なものが目立つようである。

B類

器受部の形態は、A類と大きく変わらないが、突出部の端部にほとんど造作を加えない器台を、B類とする(第26図1・6・16)。

B1類 B類のうち、器受部に透かし孔のみられるものを、B1類とする(第26図1・6)。1の器受部の透かし孔は、隅丸長方形気味の楕円形で5箇所に、脚部の透かし孔は、「二段三方(互い違い)」(宮井2011:13頁)の6箇所に穿たれており、全体に丁寧な細かいミガキが施されているようである。

B2類 B類の器台で、器受部、脚部に透かし孔のみられないものを、B2類とする(第26図16)。16の器台は、後張遺跡C地点の河川跡出土であり(恋河内2005:第109図73)、帰属する時期を絞ることがむづかしい資料である。

C類

突出部の突出が弱く、突起、突帯に近い器台を、C類とする(第26図7・11・12・17～20)。器受部は、A・B類に比べ、総じて浅く、小さいようである。

C1類 C類のうち、器受部に透かし孔のみられるものを、C1類とする(第26図7・11・12・17)。

C2類 C類のうち、器受部に透かし孔のないものを、C2類とする(第26図18～20)。

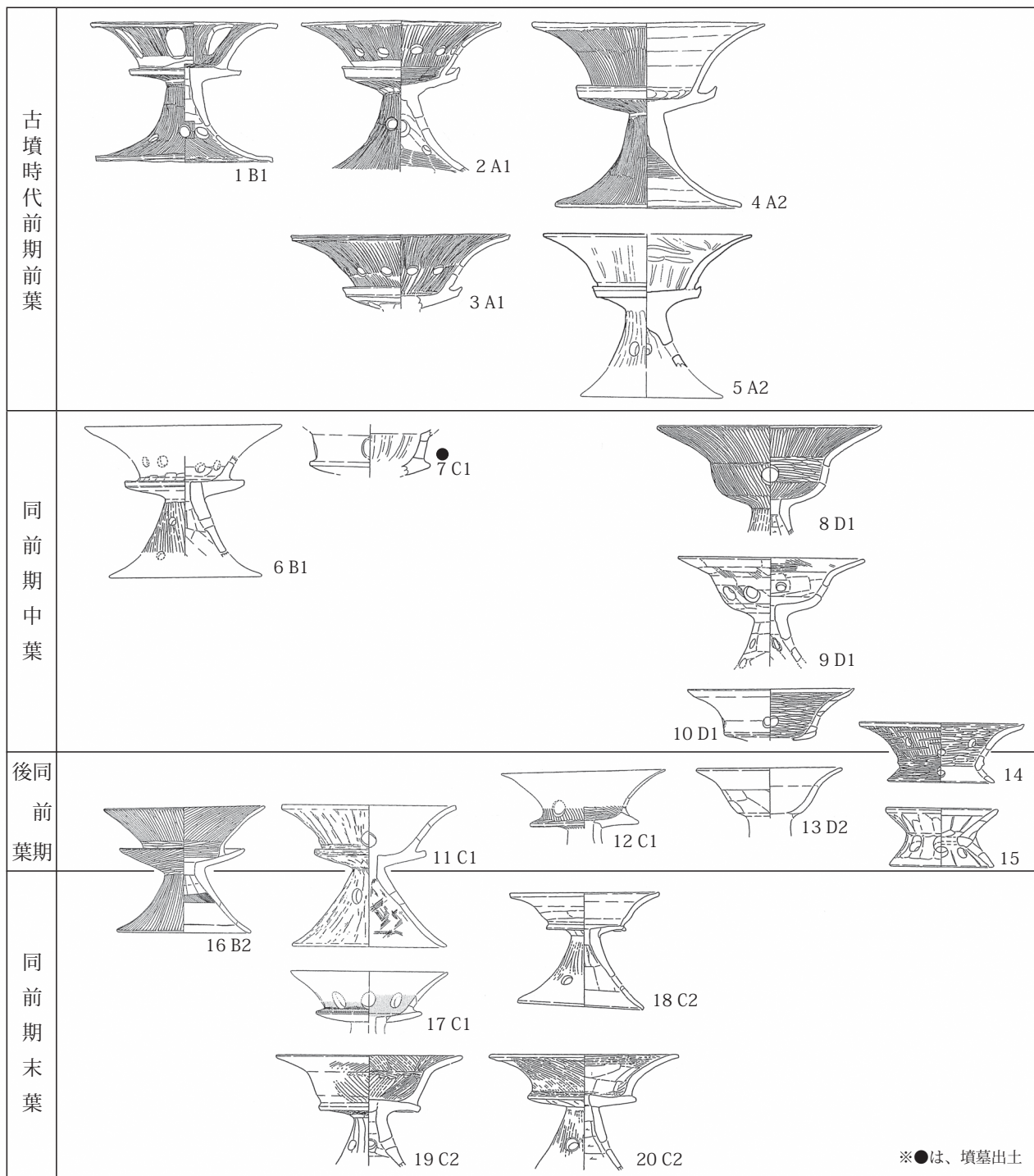
D類

突出部のない装飾器台を、D類とする(第26図8～10・13)。突出部は、屈折部、屈曲部となり、また器受部中位でわずかに屈曲して、口縁部にかけて開く形態が目立つ(第26図8・9)。

D1類 D類のうち、器受部に透かし孔のみられるものを、D1類とする(第26図8～10)。

D2類 器受部に透かし孔のないものを、D2類とする(第26図13)。

装飾器台の変遷は、古墳時代前期前葉には、A類、器受部に独特の透かし孔を有するB1類がみられ、中葉にはD類が、後葉を前後して、C類がみられるようになり、末葉には、ほぼC類が卓越するようになる、といった過程として復元することができる。



第 26 図 装飾器台、鼓形器台の変遷（縮尺：1 / 6）

全体的に前期中葉以降の資料は、河川跡や溝跡出土資料が多く、時期限定に困難が付きまとう。D 類の位置付けなど、さらなる検証が必要であろうが、断続的に複数回にわたって流入した器種である可能性も考慮すべきであろう。

c 鼓形器台

鼓形器台は、2 例のみではあるが、久下前地区 C4

地点の河川跡から出土している（第 26 図 14・15）。14 は、赤彩された例で、どちらが口縁部、脚部なのか判断に迷う例である。15 は、変容の著しい例であり、本稿の小型器台 F 類（第 25 図 33～35）、「X 字形器台」に似ているとみることできる。久下前地区 C4 地点の河川跡からは、古墳時代前期前葉を主とする土器が出土しており、とくに 14 の器台は、時期的にさらに遡る可能性も残ると考えられる。

Ⅱ 児玉地域における古墳時代前期の土器様相にかかわる問題点

児玉地域における古墳時代前期の土器様相について考える中で気付いた2、3の問題点を記し、まとめに代えることにしたい。まず、土器編年にかかわる問題点から記しておく。

本地域は、「石田川式土器」の分布域とみられることもあり、「五領式土器」の問題には、あえて触れずに議論を進めた。「五領式土器」にかかわる学史的な問題や細別の問題(石坂 2005、金井塚 1971、黒沢 2001、埼玉県史編さん室 1982、横川 1982 ほか)については、ひとまず置き、「五領式」設定の基準資料である東松山市五領遺跡出土土器(金井塚 1968・1971、熊野 1987、黒沢 2001、杉原 1971 ほか)の位置付けについて簡単に触れておきたい。

細かな比較はできないが、甕、壺、鉢、高坏、器台の特徴に照らして、五領遺跡出土土器には、前期の初期の段階(前期前葉)と最終段階(前期末葉)の土器が欠けていることは、容易にみて取ることができる。つまり、五領遺跡出土土器として目の前に示された土器群は、古墳時代に限れば、古墳時代前期中葉～後葉の土器にほぼ限定される。

また、改めて記すまでもないことではあるが、五領遺跡出土土器には、極めて高い比率で外来系土器が含まれることが、他遺跡にはみられない特徴である。

五領遺跡出土土器の時期的な限定性と外来系土器が異様なまでに卓越するという事実からは、比企地域に限らず、同土器群をもって古墳時代前期の土器総体を規定する基準資料とすること自体至難であることが導出されよう。五領遺跡の特異性は、特異性として別に説明しなければならない大きな課題ではあるが。

埼玉県域に限っても、実際古墳時代前期全期間継続したことが推定される遺跡自体ごくわずかであり、しかもその上良好な資料が報告されている遺跡は、さらに少数である。本稿で対象とした児玉地域では、その種の継続性が推定できる遺跡、とくに集落遺跡は、久下東・久下前遺跡以外にはない(松本・町田 2002、恋河内・松本 2008 ほか)⁷⁶⁾。

結局、地域を限定して、複数の遺跡出土資料を組み合わせ、対比可能な編年を確定してゆく外ないわけであるが、この問題は、古墳時代前期という段階の遺跡の存続のあり方、延いては当該社会のあり方の問題

とも無縁ではありえない。

「地域」の問題にも触れないわけにはいかないであろう。旧郡(児玉郡、賀美郡、那珂郡)と現在の行政区分が入り組むため、本稿では、「児玉地域」(現在の本庄市、上里町、神川町、美里町により構成される、いわゆる「児玉郡市」の範囲)という地域区分を選び、議論を進めた。もちろん児玉地域は、明治時代以降にしか辿りえない行政単位のもとなりであり、人文地理的な単位ではあるが、埼玉県北部、利根川以南の古墳時代前期のS字甕の主要な分布域、あるいは東海西部系土器の集中分布域として、それなりに大きく括りうる地域であると考えたためである。

問題は、ここからである。まず、甕では、本庄市域を例にとれば、旧赤根川流域、女堀川上流域の丘陵部の集落跡を主とする樽式・樽式系土器あるいは吉ヶ谷・赤井戸式土器の分布域と女堀川中・下流域の集落跡を主とするS字甕の分布域が対象をなす様相がみられた(本稿(上):6・7頁)。旧赤根川流域、女堀川上流域の集落跡では、甕だけでなく、鉢や有孔鉢、高坏にも吉ヶ谷・赤井戸式土器の影響が強く残る例がみられる。本稿では触れることができなかったが、S字甕と平底あるいは台付のハケ甕の比率にも、細かな地域差や遺跡差がみられる。

壺の様相は、さらに複雑である。パレス壺を例にとるなら、後張遺跡(増田・立石 1982 ほか)などを好例として、集落遺跡の多くでは、パレス壺は僅少か、皆無なのが常態である。一方南志渡川遺跡の周溝墓群出土土器(長滝・中沢 2005)のように東日本全体でも異例なほどパレス壺が多数みられる墓域もあり、パレス壺が全くみられない墓域もあるなど、墓域間での特定の壺の選択の違いは際立っている(本稿(中):19・20頁)。

鉢、とくに長口縁鉢では、女堀川中流域上部の後張遺跡(前掲)と同流域下部の久下東・久下前遺跡(前掲)の相違が問題になった(本稿:第15図、4頁)。この女堀川中流域の2つの拠点的な大規模集落跡で出土した長口縁鉢には、類別した器形の構成に違いがあり、端的に言って規格性に顕著な違いがみとめられた(同上)⁷⁷⁾。

以上の遺跡や遺跡のまとまりの違い、あるいは遺跡の性格(墓域、集落遺跡など)の違いに応じた器種毎、器形毎の土器様相の差異と類似の複合的なあり方は、ここで用いた「児玉地域」という地理的範囲が、ある種の複合体であり、あくまでも土器分析のための一手段の域を出ないことを示している。

今後土器編年をさらに整備するとともに、遺跡出土土器の比較の方法を錬磨し、より実態に近い「地域」や集落群の復元に近づくことが求められている。

最後に他地域との併行関係について、再度確認しておく。

他地域との併行関係については、S字甕の変遷を軸として、東海西部との併行関係を推定した(本稿(上):16頁)。繰り返しになるが、東海西部のいわゆる「廻間編年」(赤塚1990・1997ほか)との推定した併行関係を記せば、以下のようになる(左側が本稿の時期区分)。

古墳時代前期前葉—廻間Ⅱ式2・3段階

古墳時代前期中葉—廻間Ⅱ式4段階～同Ⅲ式1段階

古墳時代前期後葉—廻間Ⅲ式2～4段階

古墳時代前期末葉—松河戸Ⅰ式前半(1・2段階)

S字甕以外に、パレス壺、鉢、高坏、小型器台の変遷も、併行関係を整序するための材料となるが、上記した対比との大きな齟齬は見出せず、おおむね補強する内容であると言ってよいと思う。

「廻間編年」(同)は、廻間遺跡が廻間Ⅲ式前半で廃絶したため、廻間Ⅲ式後半(廻間Ⅲ式3・4段階)に関しては、他遺跡例を援用し、編年を組み立てている。

この「廻間編年」のある種の難点は、その後の他遺跡の諸成果、とくに愛知県稲沢市長野北浦遺跡、塔の越遺跡の成果(石黒・早野2012)などにより、ある程度克服されたとみることができる。また、早野浩二は、「廻間編年」の整備を鋭意進めるとともに、東海西部と畿内地域の土器編年の併行関係にさらに踏み込んだ議論を展開している(早野2011・2012・2020)。早野の成果に抛り、本稿の時期区分との併行関係を探るなら、以下のようになると考えられる。

—塔の越1期—廻間Ⅲ式2段階

古墳時代前期後葉 —塔の越2期—廻間Ⅲ式3・4段階

古墳時代前期末葉—塔の越3期—松河戸Ⅰ式前半

また、早野は、西村 歩による中河内地域における庄内式、布留式土器の細分案(西村2011)を踏まえ、塔の越1～3期が、「布留式中段階古相、中相、新相(西村2011)にほぼ対応するものと思われる」(早野2012:240頁)と推断している。この併行関係についての見解を媒介とするなら、本稿の時期区分が、畿内地域の土器編年との関係でどのような位置付けにあるのが推定できる⁷⁸⁾。土器編年の併行関係についての細部の調整は、今後に託された課題である。

註

53) 樽式・樽式系の鉢とは、別に吉ヶ谷・赤井戸式の鉢があるようであるが、峻別することがむづかしいため、樽式・樽式鉢に焦点を当てる。片口鉢も、系統不明な第14図12の片口鉢以外は、樽式・樽式の片口鉢として扱う。

54) 「東海西部を媒介とするかと思われる鉢」と記したが、いわゆる「小型丸底土器」が東海西部で変容した例や本地域で変容した例を含む。実際ごく一部の鉢を除いて、起源の地を限定できる鉢は限られる。

55) 東日本の多くの地域では、古墳時代前・中期の小型直口壺(大・中型を含む場合も多い)および後述するA1a類の鉢の一部(さらに幅広く、長口縁鉢の多くを「埴」とする用例もみられる)を、長らく「埴」と呼びならわしてきた。また、この種の小型土器を、「埴」と総称することを復権すべきとする提案もみられる(加納2022)。

「埴」の呼称は、多様な器形を包含するため汎用性が高いが、系統関係などに踏み込むには不向きであると考えに至っている。

56) 類別の方法としては、まず口径／器高比と口縁部高／器高比を、それぞれ横軸、縦軸にとった分布図(散布図)を作成し、ごく感覚的ではあるが、視認できる点の集中する範囲と点のみられない空隙を手掛かりに類別した。散布図の点とそれに対応する鉢の図が参照できるようにし、経験的にみて区分に無理がないか確かめながら、類別を試みた。

口径／器高比、口縁部高／器高比を用いた器形の数値化では、全形と口縁部の相対的な縦方向の長さは比較できるが、胴部最大径や屈折部径など横方向の大きさは考慮の外に置かれる。法量の数値化の方法自体、今後さらに一考を要する。

57) 第15図に用いた古墳時代前期の大型・中型直口壺、古墳時代中期の小型直口壺の資料は、以下のとおりである。

古墳時代前期の大型・中型直口壺に関しては、久下東・久下前遺跡出土の完形品、準完形品33点の計測値を用いた(恋河内・的野2010ほか)。大型・中型直口壺と小型直口壺では、器高に比した口縁部の長さが総じて後者の方が長いなど微妙に異なる点もみられるため、あくまでも参考資料ということになる。

古墳時代中期の小型直口壺に関しては、九反田遺跡1号溝および河川跡出土の完形品、準完形品40点(松本2004)、久下前地区D1地点河川跡出土の完形、準完形品46点の各計測値を用いた(恋河内2012)。長口縁鉢A1類の範囲に入る例が4点、他の前期の鉢の範囲に入る例およびいずれの範囲にも収まらない例が4点みられた。これらを除き、中期の小型直口壺の範囲とした。

総じて中期の小型直口壺は、規格性が極めて高く、点が狭い範囲に集中する傾向がみられた。後述する長口縁鉢A1類の範囲に入る中期の小型直口壺は、いずれも久下前地区D1地点河川跡出土例であり、同河川跡出土土器の多くが、中期前半というより中期最初頭であることに関係するのかもしれない。

58) 寺沢 薫は、「小型丸底鉢」が、「口径ないしは体部最大径が器高を凌駕する点において」(寺沢1986:79頁)、「小型丸底壺」と明確に分けられることを指摘している。

59) 中期の小型直口壺が、壺と鉢の中間的な器形であるのは、壺と鉢の中間的な機能を担うべく創出された器形であるためかもしれない。

60) 後張遺跡、久下東・久下前遺跡から出土した鉢のみでは、前期後葉以前の鉢に限られるため、補足資料として、女堀川中流域上部に関しては、東牧西分遺跡A地点6・39号住居跡出土鉢、地神遺跡9号住居跡他出土鉢各4点(恋河内1995:第86図2・3他、岩瀬1998:第15図4他)、雷電下遺跡A地点25号住居跡出土鉢、塚島遺跡A地点2号住居跡出土鉢、浅見境北遺跡31号住居跡出土鉢各2点(横川・増田・駒宮ほか1979:第48図17・18[17は台付鉢]、大屋・恋河内1991:第37図1・2、恋河内1997:第250図9・12)、社具路遺跡4号土坑出土鉢、鷺山古墳出土鉢各1点(長谷川・石橋・山川ほか1987:第170図25、増田・坂本ほか1986:第5図5)の計測値を加えた。

女堀川中流域下部に関しては、下田遺跡5号住居跡出土鉢5点(増田・柿沼・小久保ほか1979:第17図16・19～22)、浅見山I遺跡8号方形周溝墓出土鉢2点(松本・大熊ほか2009:第56図3・4)の計測値を加えた。

また、女堀川流域ではないが、前期前葉、前期末葉の好例として、美里町野中遺跡遺物集中区出土鉢2点(宮井2011:第32図52・53)、上里町中堀遺跡2号住居跡出土鉢2点(田中・末木・福田1997:第17図5・6)の計測値を付加した。

61) 器形のみに限定した観点ではあるが、口径／器高比、口縁部高／器高比によって、長口縁鉢全体を首尾一貫して区分できることからすれば、古墳時代の「民俗分類」である器形区分の基準が、この2つの比率と関連する可能性は考えてもよいのかもしれない。この問題については、改めて検討する機会をもちたいと思う。

62) 併行関係についてのやや込み入った議論は後述するが、本稿の大型・中型の長口縁鉢B2・B3類に類似した鉢が、本稿前期後葉にほぼ併行する段階と考えられる、伊勢湾岸の「塔の越1期」(石黒・早野ほか2012:第417図)に出現するとされている。ただし、この種の長口縁鉢の故地についての言及はみられない。

63) この幅1、2mmの細かいミガキは、鉢だけでなく、小型壺、高坏、器台などの最終調整としても用いられている。時期的な問題もあるが、この種のミガキのみられる土器が多出する遺跡は、後張遺跡A地点など、ごく一部の遺跡、地点に限られるようである。

64) 次山 淳の古墳時代前期の精製土器「A群」、「B群」の区分は、器形、成形手法、整形・調整手法の違いだけでなく、胎土の砂粒組成、色調なども加味した区分である(次山1993)。この精製土器2種は、三好 玄により精製土器「II群」、「I群」としてさらに

整備され、遺跡間の違いの指標などに適用されるに至っている(三好 2007・2010)。因みに、次山の精製土器「B 群」、三好の「I 群」は、吉備南部に由来するとされ、次山の精製土器「A 群」、三好の「II 群」は、山陰に由来する土器であるとされている。

この 2 種の精製土器が、畿内やその周辺地域だけでなく、布留式土器の影響がみられる、より広範な地域で、どのような形で発現したのかは明らかではない。

- 65) 第 19 図の屈曲口縁鉢の中で、河川跡を除く遺構出土例は、第 19 図 3 の久下前地区 C3 地点 104 号住居跡出土土器(恋河内・藤根ほか 2018: 第 125 図 3)、第 19 図 4 の同遺跡同地区 C3 地点 222 号土坑出土土器(同書: 第 291 図 6)の 2 点である。久下前地区 C3 地点の 104 号住居跡は、第 19 図 3 の鉢以外に、S 字甕片などが出土しており、古墳時代前期の遺構であることは確かであるが、細かな時期を限定することはむづかしい。222 号土坑は、時期限定自体困難な遺構である。
- 66) 立花 実による屈曲口縁鉢の分類によれば、第 19 図 1 は「A 類」、同図 3・4 は「A I 類」、2・5・6 は「C I 類」、7 は「C II 類」、8 は「D I 類」ということになるか。他遺跡における共伴関係などからすれば、第 19 図 1・3・4 の「A 類」、「A I 類」(上掲)の屈曲口縁鉢が、第 19 図の他の屈曲口縁鉢に比べ、時期的にやや先行する可能性があるのかもしれない。
- 67) 甕は、基本的に煮沸具であるから、外面に吹きこぼれなどの炭化物の付着がみられるなど、使用痕にも鉢とは異なる特徴がみられることも多い。しかしながら、小型の平底の S 字鉢の器外面に、炭化物が濃密に付着する例もあり(第 20 図 1)、予断を許さない。
- 68) ここで記す S 字鉢の分類は、分類基準を含め S 字甕の分類とほぼ同じであり、各類別の時間的な位置付けも S 字甕に準拠した。S 字鉢の場合、過半数が小型鉢であり、口縁部の造作など小型土器ゆえの制約があるであろうし、肩部の横ハケも肩部自体が狭いという縛りがあるかと思う。
- 69) S 字鉢の推移、変遷の概略を列記しておきたい。
前期前葉: A1a 類 + A2a 類? + A3a 類
前期中葉: A1b 類 + A2b 類 + A3b 類
前期後葉: A3a 類 + A3b 類 + B 類 + C 類
前期末葉: A3a 類 + A3b 類 + A4 類 + B 類
- 70) 本稿においても(本稿(上): 1・2 頁)、「有孔鉢」ではなく「甗」の呼称を用いている。ここに訂正する。
- 71) 有孔鉢(「小型甗」)の長期にわたる通時的な変化を描いた柿沼幹夫による先駆的な研究がある(柿沼 1976)。
- 72) 坏部が直線的に立ち上がる高坏 B1 類に関しては、赤塚次郎が「犬山扇状地・中濃地域を含めた濃尾平野北部・山間部」(赤塚 1997: 80 頁)の「廻間 II 式期の地域的な様相」(同)とした愛知県春日井市勝川遺跡周溝墓出土土器にみられる(同: 80 頁および 81 頁: 第 10 図)。したがって、高坏 A1 類はひ

とまず置き、高坏 B1 類(第 23 図 6・13)については、在来(在地)化した高坏とみる見方とともに、東海西部の一部の地域の影響を受けた高坏とする見方もありうるとしたい。

この問題は、有稜高坏 B4 類の一部が、赤塚の主張する「西濃型高杯」(赤塚 1997: 80 頁、本稿: 13 頁)に類似することとも関連し、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、児玉地域の土器様相に影響を与えた地域の特定的な手掛かりとなろう。

- 73) 中河内地域の庄内～布留式期の土器編年を整備した西村 歩によれば、本稿畿内系高坏 A 類は、吉備系の有段高坏に由来し、庄内式期にほぼ限定される高坏(西村 2008)であり、横位の細かなミガキを特徴とする B 類は、「庄内系高杯 A 類」(同)とされ、細かな器形変化を無視すれば、少なくとも庄内式期から布留式中段階まで、あるいはそれ以降まで存続する高坏とされている(同)。
- 74) いわゆる「X 字形器台」(後述する本稿 F 類)は、器受部と脚部がともに直線的に開き、口径、脚端径が近似するなど強い規格性がみられるため、単に器受部が直線的に開く A 類とは、明確に区別でき、かつ系統、盛行時期が異なると考えられる。
- 75) 本稿の「器台 D 類」、「器台 E 類」は、書上正博が上尾市稻荷台遺跡出土の古墳時代前期土器を分析する際用いた類別、「器台 1E 類」、「器台 1G 類」(書上 1994: 171-173 頁)に類似する。「器台 1G 類」に関して、書上は、赤塚次郎の指摘(赤塚 1993)を参考にして、「山陰東部地域」に通有の器台であることを追認している。また、同様の脈絡で、同遺跡で書上分類「高坏 2C 類」、山陰系の低脚高坏(低脚杯)が出土していることにも注意を促がしている(書上 1994: 同上)。
- 76) 児玉地域では、古墳時代前期全般にわたり継続することが推定される遺跡としては、他に美里町南志渡川遺跡の周溝墓群(長滝・中沢 2005)を掲げることができる。ただし、南志渡川遺跡の周溝墓群に対応し、同様の継続性を示す集落遺跡が近隣にあるかどうかは、定かではない。
- 77) 後張遺跡と久下東・久下前遺跡の違いとしては、他に後張遺跡出土土器に、S 字甕 F 類(「山陰系 S 字甕」)、屈曲口縁鉢、装飾器台がほとんどみられないことなどが指摘できる。
- 78) 早野は、東海西部と畿内地域の土器編年の併行関係についても別に発言しており(早野 2020)、通常「布留 0 式」(寺沢 1986: 367-369 頁)、あるいは「庄内式新段階後半」(森岡・西村 2006: 第 4 表)の基準資料とされる纏向遺跡辻土坑 4 下層出土土器(石野・関川編 1977)を、「ほぼ早 5 期(≒廻間 II 式 3 段階)に対応する」(早野 2020: 377 頁)と断定している。
- 早野の結論は、纏向遺跡遺構出土土器の出土層位の再検討を踏まえたものであり、首肯できよう。間接的ではあるが、本稿の古墳時代前期前葉の上限を推定するための材料である。

引用・参考文献

- 青木和明・飯島克己・若狭 徹 1987「箱清水式と樽式」『弥生文化の研究 第4巻』雄山閣
- 青木一男 1989「土器にみる森將軍塚古墳出現の前後」『長野県埋蔵文化財センター紀要』3 長野県埋蔵文化財センター
- 青木一男 1993「土器様相変化の素描」『長野県考古学会誌』69・70 長野県考古学会
- 青木一男・土屋 積・町田勝則 1996『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書7ー長野市内その5ー大星山古墳群・北平1号墳』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書20 長野県埋蔵文化財センター
- 赤熊浩一・福田 聖ほか 2011『反町遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第380集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 赤塚次郎 1986a「『S字甕』覚書 '85」『年報 昭和60年度』愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1986b「『S字甕』について」『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後』愛知県考古学談話会
- 赤塚次郎 1987「逍遙する土器」『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後 研究・報告編』愛知県考古学談話会
- 赤塚次郎 1990「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1992「東海系のレース」『古代文化』第44巻第6号 古代学協会
- 赤塚次郎 1993「東海系器台覚書」『庄内式土器研究』IV 庄内式土器研究会
- 赤塚次郎 1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 1996「濃尾平野低地部における古墳時代の甕」『第4回考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 赤塚次郎 1997「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集 愛知県埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎 2006「東海系土器と東日本の墳丘墓」『古式土師器の年代学』大阪府埋蔵文化財センター
- 赤塚次郎・早野浩二 2001「松河戸・宇田様式の再編」『研究紀要』第2号 愛知県埋蔵文化財センター
- 浅野一郎 1999『大久保山Ⅴ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告5 早稲田大学
- 浅間 陽 2014『山王山遺跡ーA1・A2地点ー』本庄市埋蔵文化財調査報告書第40集 本庄市教育委員会
- 安達厚三・木下正史 1974「飛鳥地域出土の古式土師器」『考古学雑誌』第60巻第2号 日本考古学会
- 甘粕 健・春日真実編 1994『東日本の古墳の出現』山川出版
- 新井 端 2011『埼玉県指定史跡「塩古墳群」の調査』熊谷市埋蔵文化財調査報告書第10集 熊谷市教育委員会
- 荒木勇次 2000「北毛地域の概要」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年(第1分冊)』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会
- 有山径世 2008『川越田遺跡Ⅲ』本庄市埋蔵文化財調査報告書第9集 本庄市教育委員会
- 有山径世・高橋清文 2011『飯倉南部遺跡群』本庄市遺跡調査会報告書第39集 本庄市遺跡調査会
- 飯島克己・若狭 徹 1988「樽式土器編年の再構成」『信濃』第40巻第9号 信濃史学会
- 飯塚恵子・田口一郎 1979「小八木遺跡調査報告書1」高崎市文化財調査報告書第8集 高崎市教育委員会
- 五十嵐 信・南雲芳昭ほか 1986『中村遺跡：関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書(KC-3)』渋川市発掘調査報告書第11集 渋川市教育委員会
- 池本正明・赤塚次郎ほか 2009『下懸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第144集 愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター
- 石岡憲雄 1982「『古ヶ谷式』と『岩鼻式』について」『埼玉県立歴史資料館研究紀要』第4号 埼玉県立歴史資料館
- 石黒立人・早野浩二ほか 2012『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第417集 愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター
- 石坂俊郎 2005a「埼玉県の出現期古墳ーそして三ノ耕地遺跡ー」『東日本における古墳の出現』考古学リーダー4 六一書房
- 石坂俊郎 2005b「五領遺跡出土土器の今昔」『研究紀要』第27号 埼玉県立歴史資料館
- 石坂俊郎 2006「南関東の様相」『第11回 東北・関東前方後円墳研究会 大会《シンポジウム》前方後方墳とその周辺 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会
- 石野博信・関川尚功編 1977『纏向』桜井市教育委員会
- 市村慎太郎 2012「布留式と画期」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会
- 井上和人 1983「『布留式』土器の再検討」『文化財論叢』同朋舎出版
- 磯野治司・新井信弘 1994『八重塚遺跡』北本市埋蔵文化財調査報告書第1集 北本市教育委員会
- 岩崎卓也 1984「シンポジウム『古墳出現期の地域性』に向けて」『古墳出現期の地域性』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所
- 岩瀬 譲 1998『地神/塔頭』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第193集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 植野浩三・信里芳紀ほか 1997『五村遺跡』奈良大学考古学研究室調査報告書第14集 滋賀県虎姫町教育委員会・奈良大学考古学研究室
- 宇賀神誠司 1988「長野県における古墳時代前期の地域的動向」『長野県埋蔵文化財センター紀要』2 長野県埋蔵文化財センター
- 牛山英明 1998「東京低地周辺域における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』XVII 庄内式土器研究会
- 梅沢太久夫・高橋一夫・浅野晴樹ほか 1981『六反田』岡部町六反田遺跡調査会・埼玉県立歴史資料館
- 大木紳一郎 1997『南蛇井増光寺遺跡Ⅴ』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第217集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団

大木紳一郎 2001a「元総社西川遺跡出土の古墳時代前期の土器について」『元総社西川遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第288集 群馬県埋蔵文化財調査事業団

大木紳一郎 2001b「群馬北辺の弥生社会—後期弥生社会の分析から—」『研究紀要』22 群馬県埋蔵文化財調査事業団

大木紳一郎 2020「群馬県における弥生時代後期の土器について」『研究紀要』38 群馬県埋蔵文化財調査事業団

大熊季広・和久拓照 2010『田端南堂遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第28集 本庄市遺跡調査会

太田博之 2002『東五十子・川原町』東五十子遺跡調査会

太田博之・佐藤好司 1991『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ—公卿塚古墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告第19集 本庄市教育委員会

太田博之ほか 2007『西五十子古墳群』本庄市埋蔵文化財調査報告書第5集 本庄市教育委員会

太田博之・松本 完 2003『宍勝寺裏埴輪窯・宍勝寺北裏』本庄市埋蔵文化財調査報告第26集 本庄市教育委員会

太田博之・松本 完 2005『四方田(Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ次調査)・久下東(Ⅱ次調査)』本庄市埋蔵文化財調査報告第31集 本庄市教育委員会

大谷 徹 2007『夏目／夏目西／弥藤次』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第346集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大谷 徹・福田 聖 2011『川越田遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第375集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

大塚昌彦 2014『長沖古墳群XⅣ—久保地区D地点・第66号墳—』本庄市埋蔵文化財調査報告書第42集 本庄市教育委員会

大参義一 1967「S字状口縁土器考」『いちのみや考古』—宮考古学会

大参義一 1968「弥生式土器から土師器へ 東海地方西部の場合」『名古屋大学文学部研究論集』XⅣⅦ(史学16) 名古屋大学

大村 直・菊池健一 1984「久ヶ原式と弥生町式—南関東地方における弥生時代後期の諸様相(予報)—」『史館』第16号 史観同人

小澤正人 1996『大久保山Ⅳ』早稲田大学本庄校地文化財調査報告4 早稲田大学

及川良彦・池田 治・北村尚子 1994「関東における近江系土器について」『庄内式土器研究』Ⅷ 庄内式土器研究会

書上正博 1994『稲荷台遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第139集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

柿沼幹夫 1976「甕形土器に関する一考察—南関東地方出土例を中心として—」『埼玉考古』第15号 埼玉考古学会

柿沼幹夫 1982「吉ヶ谷式土器について」『土曜考古』第5号 土曜考古学研究会

柿沼幹夫 1987「埼玉県北西部地方の櫛描文土器」『埼玉考古』第23号 埼玉考古学会

柿沼幹夫 1994「吉ヶ谷式土器を出土する方形周溝墓」『検証! 関東の弥生文化』埼玉県立博物館

柿沼幹夫 1996「北関東①埼玉県」『関東の方形周溝墓』同成社

柿沼幹夫 2006「岩鼻式土器について」『土曜考古』第30号 土曜考古学研究会

柿沼幹夫 2014「荒川中下流域における古墳時代前期前半の施設を有する墳墓」『埼玉考古』第49号 埼玉考古学会

柿沼幹夫 2015「吉ヶ谷式・吉ヶ谷系土器の移動」『ゆくものくるもの—北関東の後期弥生文化—』かみつけのさと博物館

柿沼幹夫 2016「頸胸部帯縄文甕—交差編年・地域間交流の鍵—」『埼玉考古』第51号 埼玉考古学会

柿沼幹夫 2019「牛王山遺跡出土弥生土器の編年の位置づけ」『牛王山遺跡総括報告書』和光市埋蔵文化財調査報告書第66集 和光市教育委員会

柿沼幹夫・小久保 徹 1978『東谷・前山2号墳・古川端』埼玉県遺跡発掘調査報告書第16集 埼玉県教育委員会

金井塚良一 1965「五領遺跡C区の発掘調査」『埼玉考古』第3号 埼玉考古学会

金井塚良一 1971「五領遺跡B区の発掘と五領式土器についてのわれわれの見解」『台地研究』No.19 台地研究会

金井塚良一ほか 1976『北武蔵考古学資料図鑑』校倉書房

金子彰男 1991『池田遺跡第1地点』神川町遺跡調査会発掘調査報告第2集 神川町遺跡調査会

金子彰男 2000「埼玉県における弥生後期の土器編年について」『第9回東日本埋蔵文化財研究会 東日本弥生時代後期の土器編年(第1分冊)』東日本埋蔵文化財研究会福島県実行委員会

加納俊介 1990「S字甕とS字甕もどき 土器分類雑考(2)」『マージナル』10 愛知考古学談話会

加納俊介 1991「土師器の編年4 東海」『古墳時代の研究6 土師器と須恵器』雄山閣

加納俊介 1997「廻間式か元屋敷式か—東国からみた弥生土器と土師器の境界—」『西相模考古』第6号 西相模考古学会

加納俊介 1998「S字甕の波及と定着」『静岡の考古学』静岡の考古学編集委員会

加納俊介 2000「S字甕の分類を考える」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

加納俊介 2022「型式学と分類学・その3」『古墳出現期土器研究』第9号 古墳出現期土器研究会

神川町教育委員会編 1989『神川町誌』神川町

上里町史編集専門委員会編 1992『上里町史 資料編』上里町

蒲原宏行 1989「北部九州出土の畿内系二重口縁壺—その編年と系譜をめぐって—」『古文化談叢』第20集・中 九州古文化研究会

川村浩司 1999「庄内式並行期における上野出土の北陸系土器について」『庄内式土器研究』XⅨ 庄内式土器研究会

君島勝秀・大谷 徹 1999『長沖古墳群』埼玉県埋蔵文

化財調査事業団報告書第234集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

桐原 健 1968「二重口縁をもつ土器の系譜と性格」『考古学研究』第15巻第1号 考古学研究会

熊野正也 1987「五領遺跡における外来系土器の検討」『駿台史学』第70号 明治大学史学地理学会

黒沢 浩 2004「五領遺跡出土土器の再検討に向けて」『明治大学博物館研究報告』第9号 明治大学博物館

恋河内昭彦 1990『塩谷下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1991『真鏡寺後遺跡Ⅲ－C・F・D地点の調査－』児玉町文化財調査報告書第14集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1993『川越田遺跡Ⅱ(B・C地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第5集 児玉町遺跡調査会

恋河内昭彦 1995『飯玉Ⅱ・高縄田・樋越・梅沢Ⅱ・東牧西分・鶴時・毛無し屋敷・石橋』児玉町文化財調査報告書第17集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1996a『辻堂遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第19集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1996b『辻堂遺跡Ⅱ・南街道・宮田遺跡』児玉町文化財調査報告書第20集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1997『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1999a『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第31集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 1999b『雷電下Ⅲ・南ノ前遺跡』児玉町文化財調査報告書第32集 児玉町教育委員会

恋河内昭彦 2005『後張遺跡Ⅲ(C地点の調査)』児玉町遺跡調査会報告書第20集 児玉町遺跡調査会

恋河内昭彦 2006『金屋下別所遺跡B地点 塩谷平氏ノ宮遺跡 塩谷下大塚遺跡E地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第1集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦 2012『久下前遺跡Ⅳ(D1・E1地点)・久下東遺跡Ⅴ(F1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第28集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦ほか 2016『久下東遺跡Ⅸ(C2・D2・D3・E2・E3・E4地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第49集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦・藤根 久ほか 2018『久下前遺跡Ⅵ(C2・C3・C4・F2・F3地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第53集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦・藤根 久ほか 2019『久下東遺跡Ⅹ(G2・H地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第57集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦・藤根 久ほか 2020『久下前遺跡Ⅶ(A2・D2・D3・G地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第61集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦・松本 完 2008『七色塚遺跡Ⅱ・北堀新田前遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦・の野善行 2010『北堀久下塚北遺跡Ⅱ(B地点)・久下東遺跡Ⅳ(C1・D1・E1地点)・久下前遺跡Ⅱ(A1・B1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集 本庄市教育委員会

恋河内昭彦・の野善行 2014『七色塚遺跡Ⅲ(B2地点)・

北堀久下塚北遺跡Ⅲ(C・D地点)・久下東遺跡Ⅶ(A2・B2・B3・F2地点)・宥勝寺北裏遺跡Ⅳ(C地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第37集 本庄市教育委員会

小坂延仁 2009「埼玉県における前期古墳の諸段階と大型古墳の出現」『第14回 東北・関東前方後円墳研究会大会《シンポジウム》前期古墳の諸段階と大型古墳の出現 発表要旨資料』東北・関東前方後円墳研究会

小坂延仁 2014「埼玉県の様相」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会

小島純一 1983「赤井戸式土器について－赤城山麓の後期弥生土器の一樣相－」『人間・遺跡・遺物』文献出版

小林健二 1993「外来系から在来系へ 甲斐のS字甕の変遷」『研究紀要』9 山梨県立博物館・山梨県埋蔵文化財センター

小林健二 1998a「山梨県出土の東海系土器－波及と定着と変容－」『山梨県考古学協会誌』第10号 山梨県考古学協会

小林健二 1998b「甲斐における古式土師器の成立－3・4世紀の土器編年と墳墓」『専修考古学』第7号 専修大学考古学会

小林健二 2000「甲斐のS字甕を考える」『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会

小林正史 2017「コラム 濾過器(有孔鉢)」『モノと技術の古代史 陶芸編』吉川弘文館

小林行雄 1935「小型丸底土器小考」『考古学』第6巻第1号 東京考古学会

今平利幸 2012「栃木県内における北陸系土器の動向」『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会

埼玉県史編さん室 1982『新編埼玉県史 資料編2 原始・古代 弥生・古墳』埼玉県

酒井将史・西島庸介・早野浩二 2014「愛知県の様相」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会

坂本和俊 1984「埼玉県」『古墳時代土器の研究』古墳時代土器研究会

坂本和俊 1996「武蔵の前方後円墳」『第1回東北・関東前方後円墳研究会』東北・関東前方後円墳研究会

坂本和俊・利根川章彦ほか 1986『前組羽倉遺跡発掘調査報告』前組遺跡発掘調査団

坂本美夫 1999『米倉山B遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第163集 山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社

笹沢 浩 1978「中部高地型櫛描文の系譜」『中部高地の考古学』長野県考古学会

笹森紀己子 1986『吉野原遺跡・下加南遺跡』大宮市遺跡調査会報告別冊3 大宮市遺跡調査会

笹森紀己子 1989「小型器台形土器に関する覚書」『古代』第87号 早稲田大学考古学会

笹森紀己子 1993「大宮台地における弥生時代後期土器編年試案」『二十一世紀への考古学』雄山閣

砂生智江 2018『伊勢塚遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第435集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

佐藤康二 1997「吉ヶ谷式高坏について」『人間・遺跡・遺物3』文献出版

佐原 眞 1959「弥生土器製作技術に関する二・三の考察」『私たちの考古学』第5巻第4号 考古学研究会

新山保和 2008「群馬県出土の二重口縁壺」『研究紀要』

26 群馬県埋蔵文化財調査事業団

菅谷浩之 1978『日の森遺跡－県営美里ほ場整備事業地内遺跡－』美里村教育委員会

菅谷浩之 1984『北武蔵における古式古墳の成立』児玉町史資料調査報告(古代)第1集 児玉町教育委員会

杉崎茂樹 1993『中耕遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第125集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

杉原荘介 1971『五領遺跡出土の土器』『土師式土器集成本編1』東京堂出版

鈴木敏則 2002『西遠江の古式土師器－堤町様式－』『東海の道－平野悟朗先生還暦記念－』『東海の道』刊行会

鈴木敏則 2021『東遠江の菊川式土器の編年と画期』『遠江・駿河から広がる世界 東海と関東の後期弥生社会と交流(1)(後期弥生土器の変化と画期)』地域と考古学の会

鈴木徳雄・大屋道則 1991『辻ノ内・中下田・塚島・児玉条里遺跡』児玉町埋蔵文化財調査報告書第15集 児玉町教育委員会

鈴木徳雄・尾内俊彦・櫻井和哉 2007『児玉清水遺跡－A地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第18集 本庄市遺跡調査会

鈴木徳雄・尾内俊彦・山本千春 2010『田端中原遺跡』本庄市遺跡調査会報告書第29集 本庄市遺跡調査会

高野陽子 2006『出現期前方後円墳をめぐる二、三の問題』『京都府埋蔵文化財論集』第5集 京都府埋蔵文化財調査研究センター

高橋浩二 1999『S字状口縁台付甕の伝播とその評価』『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室10周年記念論集－』大阪大学考古学研究室

高林真人 2010『後張遺跡Ⅳ－D地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第35集 本庄市遺跡調査会

高林真人 2011『後張遺跡Ⅴ－E地点の調査－』本庄市遺跡調査会報告書第40集 本庄市遺跡調査会

滝沢規朗 2005『新潟県における古墳出現期前後に盛行する装飾器台・結合器台について』『新潟考古』第16号 新潟考古学会

滝沢規朗 2012『古墳時代前期の身の浅い鉢－越後の事例から－』『東生』第1号 東日本古墳確立期土器検討会

田口一郎 1981『XI 遺物の検討』『元島名将軍塚古墳－前方後方墳の外部施設確認調査－』高崎市文化財調査報告書第22集 高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係

田口一郎 1987『パレススタイル壺の末裔たち』『第3回東海埋蔵文化財研究会 欠山式土器とその前後 研究・報告編』東海埋蔵文化財研究会

田口一郎 2000『北関東西部におけるS字口縁甕の波及と定着』『S字甕を考える』第7回東海考古学フォーラム 三重大会実行委員会

田口一郎・飯塚恵子ほか 1981『元島名将軍塚古墳－前方後方墳の外部施設確認調査－』高崎市文化財調査報告書第22集 高崎市教育委員会社会教育課文化財保護係

田嶋明人 1986『漆町遺跡出土土器の編年的考察』『漆町遺跡Ⅰ』石川県埋蔵文化財センター

田嶋明人 2014『二重口縁壺にみる推移と変革』『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会

田中新史 2002『有段口縁壺の成立と展開』『土筆』第6

号 土筆舎

田中広明・末木啓介・福田 聖 1997『中堀遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第190集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

田中元浩 2005『畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開』『日本考古学』第20号 日本考古学協会

田中元浩 2013『古墳出現期における墳墓土器祭祀の成立と波及』『立命館大学考古学論集』VI 立命館大学考古学論集刊行会

田部井 功 1987『川が結ぶ遺跡の一考察－外来系土器を分析して－』『埼玉考古』第23号 埼玉考古学会

田村 誠・金子彰男 1997『青柳古墳群 城戸野・海老ヶ久保・十二ヶ谷戸・二ノ宮支郡』神川町教育委員会文化財調査報告第16集 神川町教育委員会

次山 淳 1993『布留式土器における精製器種の製作技術』『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会

次山 淳 1995『波状文と列点文－布留形甕にみられる肩部文様の分類・系譜・分布－』『文化財論叢Ⅱ 奈良文化財研究所40周年記念論文集』同朋舎出版

次山 淳 2006『小型丸底土器の地域色－形態からみた大和と河内－』『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

寺沢 薫 1986『畿内古式土師器の編年と二、三の問題』『矢部遺跡』奈良県立橿原考古学研究所

寺沢 薫・堀 大介 2002『箸墓周辺の調査』奈良県文化財調査報告書第89集 奈良県立橿原考古学研究所

寺島孝典 2002『御屋敷遺跡』上山田町教育委員会

東北・関東前方後円墳研究会編 2005『東日本における古墳の出現－第9回東北・関東前方後円墳研究会研究大会《シンポジウム》東日本における古墳出現期について開催記録－』考古学リーダー4 六一書房

徳山寿樹・恋河内昭彦 2000『塩谷下大塚遺跡－D地点の調査－』児玉町遺跡調査会報告書第10集 児玉町遺跡調査会

利根川章彦 1993『二重口縁壺小考(上)』『調査研究報告』第6号 埼玉県立さきたま資料館

利根川章彦 1994『二重口縁壺小考(下)』『調査研究報告』第7号 埼玉県立さきたま資料館

利根川章彦 1995『吉見町山の根古墳の年代について』『調査研究報告』第8号 埼玉県立さきたま資料館

利根川章彦 1999a『西富田・四方田条里遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第224集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

利根川章彦 1999b『北陸系装飾器台の系譜についての小論』『研究紀要』第15号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

富田和夫・赤熊浩一 1985『立野南・八幡太神・熊野太神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第46集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

友廣哲也 1994『北関東の古墳時代文化の受容』『古代』第98号 早稲田大学考古学会

直井雅尚 1999『T字紋とJ字紋－松本地域における弥生時代後期壺型土器紋様の一様相－』『長野県考古学会誌』89 長野県考古学会

直井雅尚ほか 1993『弘法山古墳出土遺物の再整理』松本市文化財調査報告 No.111 松本市教育委員会
永草康次 1994「S 字状口縁台付甕の胎土の変化」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 48 集 愛知県埋蔵文化財センター
中嶋郁夫 1997「東海東部の古式土師器」『静岡県史研究』第 13 号 静岡県
中沢良一・逸見恵大・根岸博美 2001『諏訪林古墳・池下遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第 12 集 美里町教育委員会
長滝歳康 1991『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町遺跡発掘調査報告書第 7 集 美里町教育委員会
長滝歳康・中沢良一 2005『南志渡川遺跡 志渡川古墳・志渡川遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第 16 集 美里町教育委員会
長滝歳康・中沢良一 2006『北貝戸遺跡・南十条遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第 17 集 美里町教育委員会
長滝歳康・中沢良一 2010『村後遺跡 B 地点・大仏廃寺跡・広木上宿遺跡Ⅱ』美里町遺跡発掘調査報告書第 19 集 美里町教育委員会
長滝歳康・中沢良一・池田匡彦 2012『宮ヶ谷戸遺跡・砂田遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第 21 集 美里町教育委員会
長滝歳康・中沢良一・中沢 仁 2007『北谷戸遺跡・下道堀遺跡・上耕地遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第 18 集 美里町教育委員会
新倉明彦・小野和之ほか 1990『戸神諏訪遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第 98 集 群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
新津 健 1995『大塚遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第 137 集 山梨県教育委員会・山梨県土地開発公社
西川修一 1991「関東のタタキ甕」『神奈川考古』第 27 号 神奈川考古同人会
西川修一 1994「三浦半島における S 字甕の諸形態について」『庄内式土器研究』V 庄内式土器研究会
西村彰滋ほか 1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅵ(本文編)』鳥取県教育文化財団報告書 14 鳥取県教育文化財団
西村 歩 2008「中河内地域の古式土師器編年と諸問題」『シンポジウム「邪馬台国時代の摂津・河内・泉と大和」資料集』香芝市教育委員会
西村 歩 2011「土師器の編年④近畿」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
能登 健・小島敦子 2006「関東地方における初期 S 字甕出土遺跡の立地について」『研究紀要』24 群馬県埋蔵文化財調査事業団
野々口陽子 1996「いわゆる畿内系二重口縁壺の展開」『京都府埋蔵文化財論集』第 3 集 京都府埋蔵文化財調査研究センター
長谷川 勇・石橋桂一ほか 1985『夏目遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第 5 集第 2 分冊 本庄市教育委員会
長谷川 勇・石橋桂一・山川守男ほか 1987a『社具路遺跡発掘調査報告書 本文編』本庄市埋蔵文化財調査報告第 5 集第 3 分冊 本庄市教育委員会

長谷川 勇・石橋桂一・山川守男ほか 1987b『社具路遺跡発掘調査報告書 図版編』本庄市埋蔵文化財調査報告第 5 集第 3 分冊 本庄市教育委員会
中 隆之・松本浩一 1980『下郷』関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書第 1 集 群馬県教育委員会
早野浩二 1996「「S 字甕 0 類」をめぐる」『第 4 回考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
早野浩二 1998「尾張低地部」『第 6 回考古学フォーラム岐阜大会 土器・墓が語る 美濃の独自性』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
早野浩二 2011「土師器の編年④東海」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
早野浩二 2012「長野北浦遺跡・塔の越遺跡における古墳時代の遺構・遺物について」『長野北浦遺跡・塔の越遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 417 集 愛知県教育・スポーツ振興財団・愛知県埋蔵文化財センター
早野浩二 2020「古墳時代前期の都市的な遺跡と東海系土器—土器編年の併行関係の問題を中心にして—」『日本と世界の考古学—オリーブの林と赤い大地—』六一書房
原田 幹 1994「S 字甕の拡散からみた東海系土器の動向」『庄内式土器研究』V 庄内式土器研究会
原田 幹 1996「S 字甕の分布と地域型」『第 4 回考古学フォーラム 鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
原田 幹 2000「S 字甕の波及と定着をめぐる問題」『S 字甕を考える』第 7 回東海考古学フォーラム三重大会実行委員会
樋上 昇・赤塚次郎ほか 1992『勝川遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 29 集 愛知県埋蔵文化財センター
比田井克仁 1987「南関東出土の北陸系土器について」『古代』第 83 号 早稲田大学考古学会
比田井克仁 1993「東国における外来土器の展開」『翔古論聚』久保哲三先生追悼論文集刊行会
比田井克仁 1994「南関東における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究』VII 庄内式土器研究会
比田井克仁 1995「二重口縁壺の東国波及」『古代』第 100 号 早稲田大学考古学会
比田井克仁 2001『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
平野進一 1988「弥生土器の終焉—関東地方北西部を中心として—」『群馬の考古学 創立十周年記念論集』群馬県埋蔵文化財調査事業団
深澤敦仁 1998「上野における土器の交流と画期」『庄内式土器研究』XVI 庄内式土器研究会
深澤敦仁 1999「赤井戸式土器」の行方』『群馬考古学手帳』9 群馬土器観会
福田 聖 2013a「古式土師器における甕磨き手法」『技術と交流の考古学』同成社
福田 聖 2013b『川越田遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 400 集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
福田 聖 2020「反町Ⅰ期とⅡ期の間—五領式再設定の

ために一』『研究紀要』第34号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

福田 聖・青木 弘 2019「古墳時代前期の比企地域(1)ー東松山市反町遺跡周辺を中心としてー」『研究紀要』第33号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

福田 聖・大谷 徹ほか 2012『反町遺跡Ⅲ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第393集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

藤根 久・米田恭子 2009「久下東遺跡(Ⅲ次)B1地点出土資料の自然科学分析」『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集 本庄市教育委員会

藤野一之 2012「古ヶ谷系土器の終焉に関する一考察」『駒澤考古』37 駒澤大学考古学研究室

古屋紀之 1998「墳墓における土器配置の系譜と意義ー東日本の古墳時代の開始ー」『駿台史学』第104号 駿台史学会

古屋紀之 2014「東京都・神奈川県の様相ー複合口縁壺と二重口縁壺ー」『東生』第3号 東日本古墳確立期土器検討会

細田 勝・富田和夫・利根川章彦 1984『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

堀 大介 2006『越前・加賀地域』『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

堀ノ内 泉ほか 1989『上野遺跡』三珠町教育委員会

本庄市史編集室編 1976『本庄市史 資料編』本庄市

本庄市史編集室編 1986『本庄市史 通史編Ⅰ』本庄市

本庄市史編集室編 1989『本庄市史 通史編Ⅱ』本庄市

益子享子 1992「埼玉県五領遺跡出土の弥生式土器」『明治大学考古学博物館館報』No.7 明治大学考古学博物館

増田逸朗・柿沼幹夫・小久保 徹ほか 1979『下田・諏訪』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第21集 埼玉県教育委員会

増田逸朗・小久保 徹ほか 1977『塚本山古墳群』埼玉県埋蔵文化財発掘調査報告書第10集 埼玉県教育委員会

増田逸朗・坂本和俊ほか 1986『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県県民部県史編さん室

増田逸朗・立石盛詞ほか 1982『後張 本文編・図版編Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第15集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

増田逸朗・立石盛詞ほか 1983『後張 本文編・図版編Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

増田一裕 1985『本庄遺跡群発掘調査報告書ー久下東遺跡・遺構編ー』本庄市埋蔵文化財調査報告第7集 本庄市教育委員会

増田一裕 1987『東富田遺跡群発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第9集 本庄市教育委員会

増田一裕 1990『山根遺跡発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第18集 本庄市教育委員会

増田一裕 1992『女堀川条里今井地区・前田甲遺跡発掘調査報告書ー遺構編ー』本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第1分冊 本庄市教育委員会

増田一裕 1995『前田甲遺跡発掘調査報告書ー遺物編ー』本庄市埋蔵文化財調査報告第20集第2分冊 本庄市教育委員会

松澤浩一 2005『宮内上ノ原遺跡ーB地点の調査ー』児玉町遺跡調査会報告書第18集 児玉町遺跡調査会

松本 完 2004『九反田(Ⅲ次調査)・観音塚(Ⅲ次調査)』本庄市埋蔵文化財調査報告第28集 本庄市教育委員会

松本 完 2013『久下前遺跡Ⅴ(F1地点)・久下東遺跡Ⅵ(G1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第32集 本庄市教育委員会

松本 完・大熊季広ほか 2009『浅見山Ⅰ遺跡(Ⅲ次)・久下東遺跡(Ⅲ次)A1・B1地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集 本庄市教育委員会

松本 完・町田奈緒子 2002『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告第25集 本庄市教育委員会

松本 完・町田奈緒子 2004『東本庄』本庄市埋蔵文化財調査報告第29集 本庄市教育委員会

松本 完・的野善行 2010『久下前遺跡Ⅲ(C1地点)・北堀新田遺跡Ⅲ(A1地点)・宥勝寺北裏遺跡Ⅲ(A1・B1地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第23集 本庄市教育委員会

松本 完ほか 2015『北堀新田前遺跡Ⅱ(A2・A3地点)・北堀新田遺跡Ⅳ(A2・B地点)・久下東遺跡Ⅷ(G3地点)』本庄市埋蔵文化財調査報告書第44集 本庄市教育委員会

丸山陽一・池田匡彦・中沢良一 2014『南志渡川B遺跡・熊谷後遺跡』美里町遺跡発掘調査報告書第23集 美里町教育委員会

宮井英一 2011『野中/瘦ヶ谷戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第377集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

宮井英一・福田 聖 2010『前原/大沼』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第373集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

三好 玄 2007「小型丸底土器における製作技術の二系統」『考古学に学ぶ(Ⅲ) 森浩一先生傘寿記念献呈定論集』同志社大学考古学シリーズⅨ 同志社大学考古学シリーズ刊行会

三好 玄 2010「布留式土器様式構造の再検討ー精製器種を中心にー」『待兼山考古学論集Ⅱ』大阪大学考古学研究室

村上吉正・西川修一 2000『天神谷戸遺跡』かながわ考古学財団調査報告75 かながわ考古学財団

森岡秀人 2021「列島における人の移動と社会の変革」『遠江・駿河から広がる世界 東海と関東の後期弥生社会と交流(2) 報告編』地域と考古学の会

森岡秀人・西村 歩 2006「古式土師器と古墳出現をめぐる諸問題」『古式土師器の年代学』大阪府文化財センター

森嶋 稔 1982「御屋敷遺跡」『長野県史 考古資料編 全1巻(2) 主要遺跡(北・東信)』長野県史刊行会

山川守男 1984「北武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相」『古墳出現期の地域性』北武蔵古代文化研究会・群馬県考古学談話会・千曲川水系古代文化研究所

山川守男 1990「パレス文様小型高坏にみる外来系土器の
一様相」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事
業団
山川守男・福田 聖・石坂俊郎 1998「北武蔵における
土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』XⅧ 庄内式
土器研究会
山田尚友・笹森紀己子 2020『下野田本村遺跡(第10・
11・12次)』さいたま市遺跡調査会報告書第200集
さいたま市遺跡調査会
山本 亮 2022「近畿地方中部における二重口縁壺の系
列と変遷―集落域および周溝墓・小型古墳出土の中小型
資料を中心に―」『考古学雑誌』第104巻第2号 日本
考古学会
湯川悦夫・加納俊介ほか 1981『月の輪遺跡群』富士宮
市教育委員会
横川好富 1982「埼玉県の古式土師器」『埼玉県史研究』
第10号 埼玉県
横川好富・増田逸朗・駒宮史朗ほか 1979『雷電下・飯玉東』
埼玉県遺跡発掘調査報告書第22集 埼玉県教育委員会

若狭 徹 1990「群馬県における弥生土器の崩壊過程」『群
馬考古学手帳』1 群馬土器観会
若狭 徹 2000「S字口縁甕波及期の様式変革と集団移
動―群馬県地域の場合―」『S字甕を考える』第7回東
海考古学フォーラム三重大会実行委員会
若狭 徹 2007『古墳時代水利社会研究』学生社
若狭 徹・深澤敦仁 2005「北関東西部における古墳出
現期の社会」『新潟県における高地性集落の解体と古墳
の出現』新潟県考古学会
渡井英誉 1994「月の輪平遺跡第1号住居址出土のS字
甕」『庄内式土器研究』V 庄内式土器研究会
渡井英誉 1998「大廓式土器小考―大廓式土器の画期と
その展開―」『庄内式土器研究』XⅥ 庄内式土器研究
会
渡井英誉 2021「大廓式土器の移動と社会的背景―東駿
河における型式変化と分布からの検討―」『遠江・駿河
から広がる世界 東海と関東の後期弥生社会と交流(1)
』地域と考古学の会

挿図出典および出土遺跡・遺構

※本庄市以外の遺跡には、市町名を付した。遺跡名の「遺
跡」および地点名の「地点」、遺構名の一部も省略した。
久下東・久下前遺跡に関しては、報告書で用いた遺跡名
と同じ地区名と地点名のみ記した。なお、挿図の一部に
は加除筆を加えている。

〔第1図〕

1・7・9(坂本・利根川ほか 1987:第29図1・3・4)/神
川町前組羽根倉・2号住
2(小澤 1996:第15図1)/大久保山ⅢB地区・9号住
3・6・8・10(坂本・利根川ほか 1987:第35図6～9)/
神川町前組羽根倉・3号住
4(長滝・中沢 2005:第105図19)/美里町志渡川・3号
住
5(大塚 2014:第22図1)/長沖古墳群久保地区D・4号
住
11・17(恋河内 1991:第39図1・2)/真鏡寺後F・49
号住
12(恋河内 1991:第41図1)/真鏡寺後F・50号住
13・16・18(田村・金子 1997:第93図9～11)/神川
町青柳古墳群海老ヶ久保10号墳〔墳丘下〕2号住
14(鈴木・尾内ほか 2010:第5図4)/田端中原・1号住
15(松澤 2005:第74図1)/宮内上ノ原B・22号住
19・22(大谷・福田 2011:第116図118・119)/川越田D・
51号住
20・21(恋河内 2006:第27図1・2)/塩谷平氏ノ宮・6
号住
23・24(横川・増田・駒宮ほか 1979:第47図1・2)/雷
電下A・25号住
25(大熊・和久 2010:第13図6)/田端南堂・1号住
26(鈴木・尾内ほか 2010:第7図1)/田端中原・2号住
27(恋河内 2006:第24図1)/塩谷平氏ノ宮・5号住
28(恋河内 2006:第29図3)/塩谷平氏ノ宮・7号住
29(鈴木・尾内ほか 2010:第12図4)/田端中原・4号住

30(恋河内 1990:第42図18)/念仏塚・8号住

〔第2図〕

1(長滝・中沢 2005:第107図35)/美里町志渡川・3号
住
2・3(宮井 2011:第10図31・32)/美里町野中・1号
住
5・6(宮井 2011:第32図55・56)/美里町野中・遺物集
中区
4(恋河内 1991:第39図3)/真鏡寺後F・49号住
7(恋河内・藤根ほか 2019:第7図11)/久下東G2・22
号住
8・9(恋河内 1997:第250図5・6)/浅見境北・31号住
10(恋河内・藤根ほか 2019:第237図1)/久下東H・
381号住
11(富田・赤熊 1985:第237図16)/川越田A・25号住
12(富田・赤熊 1985:第235図13)/川越田A・24号住
13・15(恋河内 1995:第181図1・3)/東牧西分C・13
号土坑
14(恋河内 1997:第289図13)/浅見境北・50号住
16(恋河内 1997:第205図1)/浅見境北・8号住
17(太田 2002:第322図4)/東五十子・1号住
18・20・21(恋河内・藤根ほか 2018:第85図9、第86
図16・17)/久下前C3・83号住
19(恋河内・藤根ほか 2018:第124図12)/久下前C3・
103号住

〔第3図〕

1(恋河内 1990:第13図11)/塩谷下大塚C・5号周溝墓
2(大熊・和久 2010:第5図8)/ミカド西・3号住
3・5(宮井 2011:第10図40、第11図57)/美里町野中・
1号住
4(山川 1984:第4図)/生野山・78号墓下1号住
6(恋河内・藤根ほか 2019:第241図6)/久下東H・383
号住

7・8(長谷川・石橋・山川ほか 1987b:第 168 図 10・12)/ 社具路・4 号土坑
 9(恋河内・的野 2010:第 118 図 57)/ 久下前 A1・河川跡
 10・12(恋河内 1995:第 117 図 11・12)/ 東牧西分 A・20 号住
 11(恋河内 1995:第 156 図 14)/ 東牧西分 A・39 号住
 13・14(恋河内 1997:第 276 図 1・2)/ 浅見境北・44 号住
 15(太田ほか 2007:第 211 図 1)/ 西五十子古墳群・18 号住
 16(太田 2002:第 322 図 1)/ 東五十子・1 号住
 17(恋河内・藤根ほか 2020:第 71 図 3)/ 久下前 G・205 号住
 18(恋河内・的野 2014:第 155 図 27)/ 久下東 B2・50 号住
〔第 4 図〕
 1(坂本・利根川ほか 1987:第 30 図 1)/ 神川町前組羽根倉・2 号住
 2(恋河内 1990:第 9 図 1)/ 塩谷下大塚 C・3 号住
 3・7・8(長滝・中沢 2005:第 106 図 27～29)/ 美里町志渡川・3 号住
 4～6(長滝・中沢 2005:第 92 図 235～237)/ 美里町志渡川古墳
 9～11・14(宮井 2011:第 10 図 36～38、第 12 図 60)/ 美里町野中・1 号住
 12・15・16(宮井 2011:第 32 図 57・59・60)/ 美里町野中・遺物集中区
 13(小久保・柿沼ほか 1978:第 94 図 3)/ 古川端・15 号住
 17(恋河内・的野 2010:第 165 図 34)/ 久下前 B1・河川跡
 18(坂本・利根川ほか 1987:第 18 図 11)/ 神川町前組羽根倉・6 号周溝墓
 19・20(恋河内・藤根ほか 2018:第 326 図 123・124)/ 久下前 C4・河川跡
 21(恋河内・藤根ほか 2018:第 127 図 2)/ 久下前 C3・105 号住
 22・25(恋河内・藤根ほか 2019:第 241 図 4・5)/ 久下東 H・383 号住
 23(恋河内 1999b:第 87 図 78)/ 雷電下 D・埋没河川跡
 24(恋河内 1997:第 219 図 3)/ 浅見境北・16 号住
 26～28・31(長谷川・石橋・山川ほか 1987b:第 167 図 2・5・7、第 168 図 1)/ 社具路・4 号土坑
 29(恋河内 1997:第 250 図 1)/ 浅見境北・31 号住
 30(恋河内・藤根ほか 2019:第 7 図 4)/ 久下東 G2・221 号住
 32(横川・増田・駒宮ほか 1979:第 49 図 30)/ 雷電下 A・25 号住
 33・34(増田・立石ほか 1982:第 156 図 7・9)/ 後張 A・166 号住
 35・36(山川 1984:第 18 図)/ 美里町日の森・1 号溝
 37(恋河内 1995:第 117 図 6)/ 東牧西分 A・20 号住
 38(増田・柿沼・小久保ほか 1979:第 16 図 3)/ 下田・5 号住
 39(恋河内・藤根ほか 2018:第 85 図 5)/ 久下前 C3・83

号住
 40(増田・立石ほか 1982:第 181 図 58)/ 後張 A・177 号住
 41(恋河内・藤根ほか 2018:第 124 図 7)/ 久下前 C3・103 号住
 42(恋河内・藤根ほか 2020:第 153 図 106)/ 久下東 G・河川跡
 43(恋河内・藤根ほか 2018:第 324 図 95)/ 久下前 C4・河川跡
〔第 5 図〕
 1～3(磯野・新井 1994:第 32 図 2・4・5)/ 北本市八重塚・1・3 号住
〔第 6 図〕
 1・2(坂本・利根川ほか 1986:第 28 図 2・5)/ 神川町前組羽根倉・2 号住
 3・11(大塚 2014:第 22 図 2・6)/ 長沖古墳群久保地区 D・4 号住
 4(増田・小久保ほか 1977:第 16 図 1)/ 美里町塚本山古墳群・33 号墓
 5(長滝 1991:第 90 図 1)/ 美里町羽黒山・8 号住
 6・12(恋河内 1990:第 12 図 1・3)/ 塩谷下大塚 C・5 号周溝墓
 7(浅野 1999:第 16 図 3)/ 大久保山Ⅳ A 地区・10 号住
 8(長滝 1991:第 82 図 2)/ 美里町羽黒山・4 号住
 9(恋河内 1990:第 40 図 8)/ 長沖古墳群久保地区 A・3 号住
 10(有山・高橋 2011:第 55 図 6)/ 神明前 1 区 C・遺構外
 13・14(大谷・福田 2011:第 116 図 116・117)/ 川越田 D・51 号住
 15(恋河内・藤根ほか 2018:第 127 図 1)/ 久下前 C3・105 号住
 16(恋河内 1991:第 39 図 4)/ 真鏡寺後 F・49 号住
 17(中沢・逸見・根岸 2001:第 54 図 27 号住 3)/ 美里町池下・27 号住
 18(恋河内 2005:第 102 図 9)/ 後張 C・河川跡
 19(横川・増田・駒宮ほか 1979:第 70 図 2)/ 雷電下 A・36 号住
 20(恋河内・藤根ほか 2018:第 112 図 1)/ 久下前 C3・97 号住
〔第 7 図〕
 1(坂本・利根川ほか 1986:第 35 図 1)/ 神川町前組羽根倉・3 号住
 2(恋河内 1990:第 12 図 4)/ 塩谷下大塚 C・5 号周溝墓
 3(長滝・中沢 2005:第 104 図 1)/ 美里町志渡川・3 号住
 4(鈴木・尾内・山本 2010:第 14 図 4)/ 田端中原・5 号住
 5(恋河内・藤根ほか 2018:第 320 図 18)/ 久下前 C4・河川跡
 6(中沢・逸見・根岸 2001:第 57 図 34A 号住 1)/ 美里町池下・34A 号住
 7(恋河内・藤根ほか 2019:第 181 図 1)/ 久下東 H・348 号住
 8(恋河内・的野 2014:第 139 図 3)/ 久下東 B2・41 号住
 9(恋河内・藤根ほか 2019:第 29 図 1)/ 久下東 G2・262

号住
 10(大谷・福田 2011：第 115 図 80)/川越田 D・51 号住
 11(横川・増田・駒宮ほか 1979：第 47 図 6)/雷電下 A・25 号住
 12(恋河内・的野 2010：第 140 図 1)/久下前 B1・19 号住
 13(増田・小久保ほか 1977：第 20 図 2)/美里町塚山古墳群・38 号墓
 14(恋河内 1995：第 116 図 1)/東牧西分 A・20 号住
 15(恋河内・藤根ほか 2018：第 320 図 28)/久下前 C4・河川跡
 16(恋河内・藤根ほか 2018：第 87 図 2)/久下前 C3・84 号住
 17・20・21(恋河内・藤根ほか 2020：第 148 図 13・18・22)/久下前 G・河川跡
 18(恋河内・的野 2014：第 104 図 2)/久下東 B2・25 号住
 19・23(恋河内 2005：第 102 図 7・8)/後張 C・河川跡
 22(恋河内・的野 2010：第 115 図 6)/久下前 A1・河川跡
 24(恋河内 2005：第 116 図 19)/後張 C・河川跡内土坑〔第 8 図〕
 1(宮井 2011：第 32 図 37)/美里町野中・遺物集中区
 2(長滝・中沢 2005：第 91 図 223)/美里町志渡川古墳
 3(恋河内 1999a：第 17 図 1)/日延 B・8B 号住
 4(徳山・恋河内 2000：第 9 図 1)/塩谷下大塚 D・2A 号周溝墓
 5(長滝・中沢 2005：第 91 図 225)/美里町志渡川古墳
 6(長滝・中沢 2005：第 104 図 2)/美里町志渡川・3 号住
 7(長滝 1991：第 92 図 1)/美里町羽黒山・9 号住
 8・9(長滝・中沢 2005：第 41 図 1・2)/美里町南志渡川・4 号墓
 10・11・13(長滝・中沢 2005：第 45 図 1～3)/美里町南志渡川・5 号墓
 12・17(恋河内・的野 2010：第 115 図 11・12)/久下前 A1・河川跡
 14～16・18(長滝・中沢 2005：第 27 図 1～4)/美里町南志渡川・1 号墓
 19(恋河内 2005：第 27 図 1)/後張 C・195 号住
 20(鈴木・尾内・山本 2010：第 19 図 9)/田端中原・7 号住
 21(長滝 1991：第 72 図 1)/美里町羽黒山・8 号古墳
 22(長滝・中沢 2005：第 33 図 1)/美里町南志渡川・2 号墓
 23・24(長滝・中沢 2005：第 49 図 1・2)/美里町南志渡川・6 号墓
 〔第 9 図〕
 1(長滝・中沢 2005：第 91 図 224)/美里町志渡川古墳
 2(長滝・中沢 2005：第 104 図 3)/美里町志渡川・3 号住
 3～5・8(宮井 2011：第 32 図 38～41)/美里町野中・遺物集中区
 6・9(恋河内・藤根ほか 2018：第 320 図 11・12)/久下前 C4・河川跡
 7(中沢・逸見・根岸 2001：第 54 図 24 号住 4)/美里町池下・24 号住
 10・11・14(大谷・福田 2011：第 115 図 97・98・

103)/川越田 D・51 号住
 12・13(恋河内・的野 2010：第 115 図 1・2)/久下前 A1・河川跡
 15・16(松本ほか 2015：第 58 図 3・8)/北堀新田前 A2・2 号墓
 17(長谷川・石橋・山川ほか 1987b：第 169 図 23)/社具路・4 号土坑
 18(恋河内・藤根ほか 2019：第 7 図 1)/久下東 G2・221 号住
 19・20・23(長滝・中沢 2005：第 33 図 2～4)/美里町南志渡川・2 号墓
 21・29(恋河内・的野 2010：第 164 図 1・5)/久下前 B1・河川跡
 22(恋河内・藤根ほか 2018：第 320 図 10)/久下前 C4・河川跡
 24(松本・大熊ほか 2009：第 58 図 5)/浅見山 I・8 号周溝墓
 25(松本・大熊ほか 2009：第 43 図 4)/浅見山 I・6 号周溝墓
 26・27(恋河内 2005：第 101 図 1・2)/後張 C・河川跡
 28・30・31(恋河内・藤根ほか 2020：第 147 図 5・8・9)/久下前 G・河川跡
 32(増田 1995：75 頁下の図)/今井諏訪・4-1 号周溝墓〔第 10 図〕
 1(恋河内・的野 2014：第 155 図 29)/久下東 B2・50 号住
 2(恋河内・藤根ほか 2018：第 320 図 9)/久下前 C4・河川跡
 3・5・12(恋河内・的野 2010：第 115 図 3～5)/久下前 A1・河川跡
 4(増田・小久保ほか 1977：第 157 図)/美里町塚山古墳群・21 号墳北トレンチ
 6・7(松本ほか 2015：第 58 図 4・9)/北堀新田前 A2・2 号墓
 8(恋河内 2012：第 52 図 2)/久下前 D1 地点・河川跡
 9(増田・小久保ほか 1977：第 20 図 4)/美里町塚山古墳群・38 号墓
 10(恋河内・藤根ほか 2018：第 352 図右)/鷺山古墳〔転載〕
 11(増田・坂本ほか 1986：第 5 図 1)/鷺山古墳
 13(恋河内・的野 2010：第 164 図 2)/久下前 B1・河川跡
 14(恋河内・藤根ほか 2018：第 85 図 1)/久下前 C3・83 号住
 15(恋河内 2005：第 101 図 5)/後張 C・河川跡
 16・17(恋河内・藤根ほか 2020：第 164 図 1・2)/久下前 G・遺構外
 〔第 11 図〕
 1(山川 1984：第 4 図)/生野山・78 号墓下 1 号住
 2・3・5・12(恋河内・藤根ほか 2018：第 320 図 20・25～27)/久下前 C4・河川跡
 4(宮井 2011：第 32 図 45)/美里町野中・遺物集中区
 6(岩瀬 1998：第 8 図 3)/地神・2 号住
 7・14～16(恋河内・藤根ほか 2020：第 147 図 10・11、第 148 図 19・21)/久下前 G・河川跡
 8(恋河内・的野 2010：第 8 図 1)/久下前 A2・河川跡
 9(細田・富田・利根川 1984：第 118 図 1)/美里町村後・

1号周溝墓
 10・13(恋河内・的野 2010:第 115 図 14・15)/久下前 A1・河川跡
 11(恋河内・的野 2010:第 164 図 6)/久下前 B1・河川跡
 [第 12 図]
 1(長滝・中沢 2005:第 91 図 226)/美里町志渡川古墳
 2(長滝・中沢 2005:第 105 図 14)/美里町志渡川・3号住
 3・4・6(長滝・中沢 2005:第 45 図 4～6)/美里町南志渡川・5号墓
 5・7(恋河内・藤根ほか 2018:第 321 図 31・32)/久下前 C4・河川跡
 8(恋河内・藤根ほか 2019:第 241 図 1)/久下東 H・383号住
 9・10(長滝・中沢 2005:第 28 図 6・7)/美里町南志渡川・1号墓
 11～14(恋河内・的野 2010:第 115 図 13、第 116 図 26・31・33)/久下前 A1・河川跡
 15・16(恋河内 1995:第 116 図 4・5)/東牧西分 A・20号住
 17～20(恋河内 1995:第 156 図 1・2・5・6)/東牧西分 A・39号住
 21(恋河内・藤根ほか 2018:第 124 図 1)/久下前 C3・103号住
 22(松本ほか 2015:第 197 図 4)/久下東 G 3・250号住
 23(増田・柿沼・小久保ほか 1979:第 16 図 1)/下田・5号住
 [第 13 図]
 1(長滝・中沢 2005:第 108 図 64)/美里町志渡川・3号住
 2～4(恋河内・藤根ほか 2018:第 321 図 42、第 322 図 44・45)/久下前 C4・河川跡
 5(宮井 2011:第 9 図 26)/美里町野中・1号住
 6(恋河内 1999a:第 17 図 5)/日延 B・8B号住
 7(宮井 2011:第 22 図 8)/美里町野中・11号住
 8(中沢・逸見・根岸 2001:第 54 図 24号住 3)/美里町池下・24号住
 9(長谷川・石橋・山川ほか 1987b:第 170 図 40)/社具路・4号土坑
 10・16(恋河内 1997:第 192 図 5・6)/浅見境北・3号住
 11(松本・大熊ほか 2009:第 32 図 2)/浅見山 I・3号周溝墓
 12(松本ほか 2015:第 58 図 6)/北堀新田前 A2・2号墓
 13(浅間 2014:第 34 図 1号周溝墓 1)/山王山 A2・1号周溝墓
 14(恋河内・的野 2010:第 116 図 35)/久下前 A1・河川跡
 15(太田・松本 2003:第 55 図 2)/宥勝寺北裏・1号周溝墓
 17・18(長滝・中沢 2005:第 28 図 11・12)/美里町南志渡川・1号墓
 19(恋河内・的野 2010:第 164 図 10)/久下前 B1・河川跡
 20(松本・大熊ほか 2009:第 58 図 6)/浅見山 I・8号周

溝墓
 21・22・24(長滝・中沢 2005:第 34 図 5・7・8)/美里町南志渡川・2号墓
 23・25(長滝・中沢 2006:第 34 図 6・7)/美里町北貝戸・11号住
 26(松本・大熊ほか 2009:第 49 図 3)/浅見山 I・7号周溝墓
 27(恋河内 1997:第 271 図 1)/浅見境北・42号住
 28(恋河内・藤根ほか 2018:第 196 図 16)/久下前 C3・145号住
 29～31(恋河内・藤根ほか 2020:第 150 図 39・42・43)/久下前 G・河川跡
 32(恋河内・藤根ほか 2018:第 86 図 13)/久下前 C3・83号住
 33(増田・立石 1982:第 175 図 1)/後張 A・176号住
 34(増田・柿沼・小久保ほか 1979:第 17 図 15)/下田・5号住
 35(小久保・柿沼ほか 1978:第 64 図 2)/前山 2号墳
 36・37(増田・立石 1982:第 181 図 45・46)/後張 A・177号住
 [第 14 図]
 1・2(坂本・利根川ほか 1987:第 29 図 7・9)/神川町前組羽根倉・2号住
 3・4(長滝・中沢 2005:第 92 図 256・257)/美里町志渡川古墳
 5(長滝・中沢 2005:第 42 図 10)/美里町南志渡川・4号墓
 6・10(鈴木・尾内・山本 2010:第 18 図 5・4)/田端中原・7号住
 7・8(長滝・中沢 2005:第 28 図 19・20)/美里町南志渡川・1号墓
 9(恋河内 1997:第 279 図 4)/浅見境北・46号住
 11(大谷・福田 2011:第 112 図 13)/川越田 D・51号住
 12(富田・赤熊 1985:第 237 図 10)/川越田 A・25号住
 [第 15 図]
 1(鈴木・大屋 1991:第 37 図 2)/塚島 A・2号住
 2・12・14(恋河内・藤根ほか 2020:第 158 図 187、第 157 図 179、第 158 図 191)/久下前 G・河川跡
 3(恋河内・藤根ほか 2018:第 86 図 26)/久下前 C3・83号住
 4(恋河内・藤根ほか 2018:第 124 図 13)/久下前 C3・103号住
 5(田中・末木・福田 1997:第 17 図 5)/上里町中堀・2号住
 6(恋河内・藤根ほか 2019:第 159 図 2)/久下東 H・336号住
 7(増田・立石 1982:第 189 図 11)/後張 A・180号住
 8(松本・大熊ほか 2009:第 56 図 3)/浅見山 I・8号周溝墓
 9(恋河内・藤根ほか 2019:第 139 図 55)/久下東 H・326号住
 10(増田・立石 1982:第 141 図 11)/後張 A・158号住
 11(恋河内・藤根ほか 2018:第 87 図 6)/久下前 C3・84号住
 13(増田・立石 1982:第 185 図 13)/後張 A・179号住
 15(宮井 2011:第 32 図 52)/美里町野中・遺物集中区

16(増田・立石 1982:第 134 図 14)/後張 A・153 号住
 17(増田・立石 1982:第 175 図 2)/後張 A・176 号住
 18(横川・増田・駒宮ほか 1979:第 48 図 18)/雷電下 A・25 号住
 19(松本 2013:第 31 図 3)/久下前 F1・182 号住
[第 16 図]
 1・4(鈴木・大屋 1991:第 37 図 2・1)/塚畠 A・2 号住
 2(松本・大熊ほか 2009:第 56 図 3)/浅見山 I・8 号周溝墓
 3(恋河内 1997:第 250 図 9)/浅見境北・31 号住
 5・6(増田・立石 1982:第 155 図 4・5)/後張 A・166 号住
 7(恋河内・的野 2914:第 155 図 37)/久下東 B2・50 号住
 8(恋河内・藤根ほか 2018:第 31 図 4)/久下前 C3・51 号住
 9・16(恋河内・藤根ほか 2019:第 159 図 1・2)/久下東 H・336 号住
 10・12(恋河内・藤根ほか 2020:第 158 図 188・187)/久下前 G・河川跡
 11(恋河内・藤根ほか 2019:第 139 図 55)/久下東 H・326 号住
 13(恋河内・藤根ほか 2018:第 86 図 26)/久下前 C3・83 号住
 14(恋河内・藤根ほか 2018:第 124 図 13)/久下前 C3・103 号住
 15(増田・立石 1982:第 52 図 8)/後張 A・74 号住
 17(田中・末木・福田 1997:第 17 図 5)/上里町中堀・2 号住
[第 17 図]
 1(恋河内・的野 2010:第 120 図 114)/久下前 A1・河川跡
 2(岩瀬 1998:第 15 図 4)/地神・9 号住
 3(恋河内 1995:第 157 図 19)/東牧西分 A・39 号住
 4(恋河内・的野 2010:第 142 図 6)/久下前 B1・20 号住
 5(増田・立石 1982:第 189 図 11)/後張 A・180 号住
 6(恋河内・藤根ほか 2019:第 139 図 59)/久下東 H・326 号住
 7(増田・立石 1982:第 181 図 53)/後張 A・177 号住
 8(増田・柿沼・小久保ほか 1979:第 17 図 19)/下田・5 号住
 9(恋河内・藤根ほか 2018:第 87 図 6)/久下前 C3・84 号住
 10(恋河内 2005:第 110 図 92)/後張 C・河川跡
 11・13・14(恋河内・藤根ほか 2020:第 157 図 181・180・179)/久下前 G・河川跡
 12(増田・立石 1982:第 141 図 11)/後張 A・158 号住
 15(増田・立石 1982:第 185 図 13)/後張 A・179 号住
[第 18 図]
 1(宮井 2011:第 32 図 52)/美里町野中・遺物集中区
 2(恋河内・藤根ほか 2019:第 241 図 9)/久下東 H・383 号住
 3(長谷川・石橋・山川ほか 1987b:第 170 図 25)/社具路・4 号土坑
 4(恋河内・的野 2010:第 120 図 115)/久下前 A1・河川

跡
 5(恋河内・的野 2010:第 166 図 50)/久下前 B1・河川跡
 6(岩瀬 1998:第 28 図 6)/地神・倒木痕 2
 7(松本・大熊ほか 2009:第 56 図 4)/浅見山 I・8 号周溝墓
 8(増田・坂本ほか 1986:第 5 図 5)/鷺山古墳
 9(横川・増田・駒宮ほか 1979:第 48 図 18)/雷電下 A・25 号住
 10(恋河内 1995:第 86 図 3)/東牧西分 A・6 号住
 11(増田・立石 1982:第 175 図 2)/後張 A・176 号住
 12(増田・立石 1982:第 189 図 4)/後張 A・180 号住
 13(増田・立石 1982:第 85 図 3)/後張 A・126 号住
 14・15・22(恋河内・藤根ほか 2020:第 158 図 192・191・193)/久下前 G・河川跡
 16(増田・立石 1982:第 134 図 14)/後張 A・153 号住
 17(増田・立石 1982:第 83 図 2)/後張 A・123 号住
 18(松本 2013:第 31 図 3)/久下前 F1・182 号住
 19(恋河内 2005:第 110 図 91)/後張 C・河川跡
 20(増田・立石 1982:第 162 図 27)/後張 A・168 号住
 21(増田・立石 1982:第 52 図 11)/後張 A・74 号住
 23(田中・末木・福田 1997:第 17 図 6)/上里町中堀・2 号住
[第 19 図]
 1(大谷・福田 2011:第 263 図 180)/川越田 D・J-8G グリッド
 2(大谷・福田 2011:第 265 図 233)/川越田 D・P-2G グリッド
 3(恋河内・藤根ほか 2018:第 125 図 3)/久下前 C3・104 号住
 4(恋河内・藤根ほか 2018:第 291 図 6)/久下前 C3・222 号土坑
 5・6・7・8(恋河内・藤根ほか 2020:第 157 図 184・182・176・183)/久下前 G・河川跡
[第 20 図]
 1～3(恋河内・藤根ほか 2018:第 326 図 140・139・127)/久下前 C4・河川跡
 4・18(高林 2011:第 22 図 67・66)/後張 E・河川跡張出部
 5(松本・的野 2010:第 32 図 3)/久下前 C1・42 号住
 6・7・9(恋河内・的野 2010:第 120 図 110・109・111)/久下前 A1・河川跡
 8(恋河内・藤根ほか 2019:第 29 図 4)/久下東 G2・262 号住
 10(恋河内・的野 2010:第 166 図 52)/久下前 B1・河川跡
 11(恋河内 2005:第 68 図 6)/後張 C・213 号住
 12(恋河内・藤根ほか 2020:第 44 図 5)/久下前 G・192 号住
 13(田村・金子 1997:第 94 図 25)/神川町青柳古墳群・海老ヶ久保 10 号墳・[墳丘下] 2 号住
 14(太田ほか 2007:第 134 図 28)/西五十子古墳群・51 号墳
 15(恋河内 2005:第 110 図 80)/後張 C・河川跡
 16(松本 2013:第 31 図 2)/久下前 F1・182 号住
 17(恋河内・藤根ほか 2020:第 8 図 14)/久下前 A2・河

川跡
 19(増田・立石 1982：第 75 図 13)/ 後張 A・100 号住
 [第 21 図]
 1・2(宮井 2011：第 31 図 35・36)/ 美里町野中・遺物集
 中区
 3(宮井 2011：第 9 図 18)/ 美里町野中・1 号住
 4(恋河内・藤根ほか 2018：第 327 図 165)/ 久下前 C4・
 河川跡
 5・6(恋河内・的野 2010：第 120 図 119・120)/ 久下前
 A1・河川跡
 7(長谷川・石橋・山川ほか 1987b：第 170 図 39)/ 社具路・
 4 号土坑
 8(恋河内 1997：第 241 図 8)/ 浅見境北・27 号住
 9(恋河内 1997：第 279 図 7)/ 浅見境北・46 号住
 10(松本・大熊ほか 2009：第 56 図 2)/ 浅見山 I・8 号周
 溝墓
 11・14(恋河内 1995：第 118 図 17・16)/ 東牧西分 A・
 20 号住
 12(恋河内 1997：第 271 図 9)/ 浅見境北・42 号住
 13(太田ほか 2007：第 188 図 3)/ 西五十子古墳群・11
 号住
 15・20(増田・柿沼・小久保ほか 1979：第 17 図 18・
 17)/ 下田・5 号住
 16(恋河内・藤根ほか 2020：第 158 図 199)/ 久下前 G・
 河川跡
 17(増田・柿沼・小久保ほか 1979：第 89 図 13)/ 諏訪・
 19 号周溝墓
 18・19(恋河内・藤根ほか 2018：第 86 図 25・29)/ 久
 下前 C3・83 号住
 21(増田・立石 1982：第 181 図 54)/ 後張 A・177 号住
 [第 22 図]
 1(長滝・中沢 2005：第 108 図 62)/ 美里町志渡川・3 号
 住
 2(恋河内 1991：第 39 図 6)/ 真鏡寺後 F・49 号住
 3(宮井 2011：第 18 図 8)/ 美里町野中・6 号住
 4(恋河内・藤根ほか 2019：第 179 図 2)/ 久下東 H・347
 号住
 5(富田・赤熊 1985：第 237 図 14)/ 川越田 A・25 号住
 6(大熊・和久 2010：第 13 図 5)/ 田端南堂・1 号住
 7(恋河内 1997：第 195 図 27)/ 浅見境北・3 号住
 8(太田 2002：第 357 図 4)/ 東五十子・20 号住
 9・11・13(富田・赤熊 1985：第 247 図 10・12・11)/
 川越田 A・7 号溝
 10(富田・赤熊 1985：第 228 図 3)/ 川越田 A・18 号住
 12(恋河内・的野 2010：第 165 図 40)/ 久下前 B1・河川
 跡
 14(増田・立石 1982：第 90 図 3)/ 後張 A・130 号住
 15(増田・柿沼・小久保ほか 1979：第 16 図 9)/ 下田・5
 号住
 16(恋河内・藤根ほか 2020：第 155 図 128)/ 久下前 G・
 河川跡
 17(恋河内・藤根ほか 2018：第 86 図 20)/ 久下前 C3・
 83 号住
 18(増田・立石 1982：第 133 図 3)/ 後張 A・153 号住
 [第 23 図]
 1・3(坂本・利根川ほか 1987：第 30 図 2・6)/ 神川町前

組羽根倉・2 号住
 2(恋河内 1990：第 13 図 6)/ 塩谷下大塚 C・5 号周溝墓
 4・5・6(長滝・中沢 2005：第 109 図 68、第 108 図
 67、第 109 図 69)/ 美里町志渡川・3 号住
 7・8・12・13(恋河内・藤根ほか 2018：第 322 図 57・
 55・54・51)/ 久下前 C4・河川跡
 9(宮井 2011：第 18 図 2)/ 美里町野中・6 号住
 10(恋河内・藤根ほか 2019：第 241 図 8)/ 久下東 H・
 383 号住
 11(恋河内・藤根ほか 2018：第 127 図 6)/ 久下前 C3・
 105 号住
 14・15・17(恋河内・的野 2010：第 119 図 89・90・
 85)/ 久下前 A1・河川跡
 16(恋河内・藤根ほか 2019：第 7 図 12)/ 久下東 G2・
 221 号住
 18(恋河内・藤根ほか 2018：第 189 図 1)/ 久下前 C3・
 140 号住
 19(松本・大熊ほか 2009：第 56 図 8)/ 浅見山 I・8 号周
 溝墓
 20(恋河内 1995：第 181 図 7)/ 東牧西分 C・13 号土坑
 21・27(恋河内・藤根ほか 2020：第 156 図 143・154)/
 久下前 G・河川跡
 22(大熊・和久 2010：第 13 図 15)/ 田端南堂・1 号住
 23(増田・立石 1982：第 155 図 2)/ 後張 A・166 号住
 24(恋河内・藤根ほか 2019：第 138 図 43)/ 久下東 H・
 326 号住
 25(増田・柿沼・小久保ほか 1979：第 17 図 13)/ 下田・
 5 号住
 26・29(恋河内・藤根ほか 2018：第 86 図 21・22)/ 久
 下前 C3・83 号住
 28(増田・立石 1982：第 136 図 1)/ 後張 A・154 号住
 [第 24 図]
 1(坂本・利根川ほか 1987：第 30 図 3)/ 神川町前組羽根倉・
 2 号住
 2・3・4(長滝・中沢 2005：第 109 図 74・73、第 108
 図 66)/ 美里町志渡川・3 号住
 5(恋河内 1997：第 17 図 13)/ 日延 B・8B 号住
 6・8・20(恋河内・藤根ほか 2018：第 322 図 50・58・
 62)/ 久下前 C4・河川跡
 7・9・10(宮井 2011：第 31 図 17・12・16)/ 美里町野中・
 遺物集中区
 11(太田・松本 2003：第 55 図 1)/ 宥勝寺北裏・1 号周溝
 墓
 12・19(恋河内・的野 2010：第 119 図 88・87)/ 久下前
 A1・河川跡
 13・18(松本ほか 2015：第 58 図 10・11)/ 北堀新田前
 A2・2 号墓
 14(恋河内・藤根ほか 2018：第 204 図 5)/ 久下前 C3・
 149 号住
 15(長滝・中沢 2005：第 34 図 10)/ 美里町南志渡川・2
 号墓
 16・17(長谷川・石橋・山川ほか 1987b：第 170 図 36・
 35)/ 社具路・4 号土坑
 21・22・27(恋河内・藤根ほか 2020：第 157 図 155・
 156、第 156 図 151)/ 久下前 G・河川跡
 23(松本・大熊ほか 2009：第 43 図 5)/ 浅見山 I・6 号周

溝墓

- 24(恋河内 1995：第 157 図 21)/ 東牧西分 A・39 号住
25(富田・赤熊 1985：第 235 図 5)/ 川越田 A・24 号住
26(恋河内・藤根ほか 2019：第 138 図 42)/ 久下東 H・326 号住
28(松本・町田 2004：第 89 図 1)/ 東本庄・遺構外
〔第 25 図〕
1(坂本・利根川ほか 1987：第 35 図 12)/ 神川町前組羽根倉・3 号住
2(恋河内 1990：第 12 図 7)/ 塩谷下大塚 C・5 号周溝墓
3・4(坂本・利根川ほか 1987：第 30 図 10・11)/ 神川町前組羽根倉・2 号住
5・6・8(宮井 2011：第 9 図 14・12・11)/ 美里町野中・1 号住
7・9(恋河内・藤根ほか 2018：第 327 図 142・146)/ 久下前 C4・河川跡
10・11・13(恋河内・的野 2010：第 120 図 107・104・103)/ 久下前 A1・河川跡
12(増田・小久保ほか 1977：第 4 図 3)/ 美里町塚本山古墳群・2 号墓
14(松本・大熊ほか 2009：第 49 図 4)/ 浅見山 I・7 号周溝墓
15(松本ほか 2015：第 58 図 12)/ 北堀新田前 A2・2 号墓
16(恋河内 1995：第 137 図 5)/ 東牧西分 A・29 号住
17(恋河内・藤根ほか 2020：第 157 図 173)/ 久下前 G・河川跡
18(長滝・中沢 2005：第 34 図 9)/ 美里町南志渡川・2 号墓
19(太田 2002：第 357 図 2)/ 東五十子・20 号住
20・23(富田・赤熊 1985：第 237 図 3・4)/ 川越田 A・25 号住
21(松本ほか 2015：第 63 図 6)/ 北堀新田前 A2・3 号墓
22(松本・大熊ほか 2009：第 43 図 6)/ 浅見山 I・6 号周

溝墓

- 24(大熊・和久 2010：第 14 図 17)/ 田端南堂・1 号住
25・26(恋河内 1995：第 86 図 5・4)/ 東牧西分 A・6 号住
27・28(恋河内・藤根ほか 2020：第 157 図 165・164)/ 久下前 G・河川跡
29(増田・柿沼・小久保ほか 1979：第 17 図 23)/ 下田・5 号住
30(増田・立石 1982：第 165 図 97)/ 後張 A・168 号住
31(増田・立石 1982：第 18 図 55)/ 後張 A・177 号住
32(高林 2011：第 24 図 30)/ 後張 E・河川跡張出部
33・35(恋河内・藤根ほか 2018：第 86 図 34・30)/ 久下前 C3・83 号住
34(増田・立石 1982：第 75 図 19)/ 後張 A・100 号住
〔第 26 図〕
1・3(宮井 2011：第 9 図 1・2)/ 美里町野中・1 号住
2(宮井 2011：第 18 図 1)/ 美里町野中・6 号住
4(宮井 2011：第 31 図 1)/ 美里町野中・遺物集中区
5(長滝 1991：第 92 図 2)/ 美里町羽黒山・9 号住
6・8～10(恋河内・的野 2010：第 120 図 101、第 119 図 98～100)/ 久下前 A1・河川跡
7(長滝・中沢 2005：第 28 図 14)/ 美里町南志渡川・1 号墓
11(菅谷 1978：第 8 図 6)/ 美里町日の森・1 号溝
12(恋河内 1997：第 228 図 11)/ 浅見境北・20 号住
13(恋河内・的野 2010：第 166 図 43)/ 久下前 B1・河川跡
14・15(恋河内・藤根ほか 2018：第 327 図 157・156)/ 久下前 C4・河川跡
16・17(恋河内 2005：第 109 図 73・74)/ 後張 C・河川跡
18～20(恋河内・藤根ほか 2020：第 157 図 160・159・158)/ 久下前 G・河川跡